

2014年度ニチメン東京社友会総会・懇親会開催のお知らせ

恒例の社友会総会・懇親会を下記要領にて開催いたします。
新年会と同様、**双日株**の本社（飯野ビルディング）で行います。
皆様多数のご参加をお待ちしております。

開催日 ; 2014年 **7月10日** (木) 12:00～14:00 (開場11:30)

会場 ; **双日株式会社・本社21階 大会議室** (2124,2125,2126,2127 会議室)
所番地——千代田区内幸町 2 - 1 - 1 飯野ビルディング内

アクセス ; *メトロ千代田線・丸ノ内線「霞ヶ関」下車、**出口C 3**
*メトロ銀座線「虎ノ門」下車、**出口 9**
(都営三田線・内幸町駅は使わない方がよいと思われます。
——現在、飯野ビル迄の連絡通路を含む周辺が改修工事中の為です。)

当日会費 ; **無料** (なお、年会費3,000円の納入は、受け付けます。)

特記事項

- ① 同封の**出欠確認のハガキ**を投函下さい・・・**6月30日(月) 必着**。
- ② このビルはセキュリティ確保のため、**入館カード** というものが必要です。
双日受付のある3階ロビーに到着したら、待機している担当世話人に**必ず氏名を告**
げて、このカードを受取った上、ゲートを通して下さい。
ゲート出入りの要領は、SUICAやPASMOの使い方と全く同じです。

*その他お問い合わせは会報末尾の「世話人一覧表」記載の世話人にお寄せ下さい。

FAX : 03-6858-7216, Eメール : menkwa@sojitz.com



2014年新年賀詞交歓会における会長挨拶

会 長 島 崎 京 一



皆さんどうも、明けましておめでとうございます。

久し振りに、懐かしい顔をこう見ておりますと、30年前、40年前、或いは50年前を思い出して、何か現役に戻ったような感じが致します——非常に懐かしい気分でございます。

それでもやはり私も80才を超えまして、今朝なども、久し振りに背広を着るのは面倒くさいな、ネクタイ締めるのも面倒くさいな、また、皆さまの前で挨拶するのもかなわんな、などと、そんな気分であったのですが、いざこうして此处で皆さんの顔を拝見致しますと、新年のご挨拶をするのも大変気分の良いことだなあ、と思い始めました。それから、この新しいビルも良いし、天気も大変良いこともあって、こうしてご挨拶出来るのは大変有難いことだな、と思って居る次第です。

ということで、80才を超えますと、何と言いますか、アベノミクスも関係ありませんし、まあ、平々凡々とニチメン時代を懐かしんでいるだけで過ごしているわけなのですが、その中で最近ひとつだけ気掛かりなことがあります。

それは、いわゆる日中関係、日韓関係が非常に悪化しているということで、これが大変気掛かりなのであります。

何故かと申しますと、私のニチメン時代の体験ですが、私自身の仕事で実は一番大きく仕事が伸びましたのは、韓国の商売であります。それから次に中国の商売ですから、海外出張も、一番多かったのは韓国と中国、というようなことでした。

韓国については、30代の前半という若い時に、或る関係から韓国の当時の農業業界の人達との付き合いが始まりまして、商売がどんどん伸びて行きました。

韓国の人達とお付き合いをしますと、その当時は私達より年上の人達が多かったため、全部日本語で、しかもこちらより立派な日本語で対応してくれる。それからご存知のように、儒教の国ですから、礼儀正しい人が多いし、仕事でも、お酒を飲むようなプライベートなお付き合いでも、大変愉快にやって来た、という思い出の深い国でございます。

一方、中国のほうは、当時田中角栄さんが周恩来さんとの間で国交回復が成立しました。それでニチメンはというと、確か当時常務で海外本部長であった森田丹さんの大英断で、当時の9大商社のうちニチメンだけがニチメンの名前で友好商社第1号としての中国商内がドンドン伸びて行きました。

私もそれに何とか乗って行こうと思って、度々中国に出張致しました。

けれども、こちらは日本語で商売するというわけには行かず、通訳が必要でした。

通訳してくれたのが住山さん、松村さん、浜本さん、というような人達でした。特に松村さん、浜本さんは私と同年輩でございますので、ご健在ならば今日ここで、ヤァヤァ久し振り、と言っても良いような仲だったわけですが、早くに亡くなられて。とても残念に思っております。

と同時に、その当時の北京は非常にきれいでした。今みたいなスモッグ、今のPM2.5というようなものではありませんでした。自動車の少ない、殆んど自転車で、北京の空は大変きれいでした。

北京飯店にはよく泊りましたけれども、前の広場も大変きれいなところで、非常に印象深い良い所でした。

そういった国々が二つとも関係がうまく行かない、というのは非常に残念であると、私自身のニチメン時代の体験から、そういうふうに乗っけておる次第です。

其れはさておきまして、本日は双日さんから佐藤社長以下、沢山の幹部の方々がわざわざおいで下さいまして、本当に有難うございます。

これからも物心両面に亘ってのご支援の程を宜しくお願い申し上げたいと思います。

また、私どもとしましては、我々ニチメンの血が流れている双日さんが更に大きく発展することを心から願っております。

今年の正月でしたか、ブラジルでしたね、大変大きな農業プロジェクトをおやりになるという、テレビ/新聞の報道がありまして、ああ頑張っておられるな、と思っていた次第です。

これからも大いに頑張ってください、というふうに思っております。

最後になりますが、この会を準備するために世話人の皆さんが大変な努力をなさったことに、ここでお礼を申し上げて、新年の挨拶とさせていただきます。

どうも有難うございました。

2014年新年賀詞交歓会風景



2014年新年賀詞交歓会における来賓ご挨拶

双日(株)代表取締役社長 佐 藤 洋 二



双日の佐藤でございます。

新年、明けましておめでとうございます。

本年は、この3月末をもちまして10周年——双日が発足して丁度10年が過ぎることになります。

思い起こすと、2004年4月1日に旧両商社が統合して以来、色々なことがございました。皆さんもご存知のように、この間に大きな損失処理をし、巨額の資金注入による増資を行い、その後は再建に向けての復配、そして優先株の消却、さらに投資適格の格付獲得、こういったことを次々と行なって参りました。2008年3月に投資適格の格付を取得したということは、マーケットに対して、双日が立派に回復したことを見せることが出来たということでございます。

このような状況でしたが、2008年の後半にはリーマン・ショックという未曾有の景気変動にさらされ、再び新たな苦難が立ちふさがるという局面を迎えました。但し、これも立派に乗り越え、ここ数年におきましては、また一つの成長軌道に向けた新しい活動に向かうことができるという環境になって来ております。

特に昨年について、我々がどういうことをやって来たかを申し上げますと、新たな資産を入れようということで、旧来我々が手掛けている資産を少し入れ替え、次の10年に向けた営業活動のための資産の積み上げを行いました。さきほど島崎会長からもお話がありましたが、農業にからむビジネスというものは必ずや成長すると信じて、ブラジルに大きな投資を行う決断を致しました。また、これからもアジアの成長、アフリカの成長は重要なものと考えております。アジアは成長が少し減速気味になっておりますが、この市場では引き続き環境、インフラといったものに加えて、消費財流通の大きな需要があり、これらの高いニーズという局面は今後も必ず続くものと信じております。最近ではインドの鉄道貨物施設があり、これは円借款ですが、一千億円を超える案件の受注を果たし、既に工事に入っております。このようなものの他にも色々な案件を手掛けております。

また、インフラ環境としては発電事業も手掛けており、この分野でも安定収益としてのアセットの積み上げを行っております。国内につきましても、エネルギーや自然エネルギー関連について、これから一つのseedsを作って行きたいと思っております。まずは太陽光をやろうということで、北海道から九州までの4カ所で合計107メガワットの発電事業を行う事を決め、先日新聞発表を行いました。東北の下北半島は70メガワットを超えるもので、東日本では一番大きな太陽光発電の事業ということになります。

こういったものを組み入れながら、新しいアセットを積み上げることで、次の10年に向かう将来の双日を作って行きたいということが、我々現役の悲願でございます。時間が掛かるものも一部ございますが、これらを確実に積み上げ、そして収益を示して行くことこそ、今まで沢山のご迷惑、ご心配をかけてきた先輩諸氏に対して、多少なりとも私共の恩返しになるのではと考えております。

いままで沢山の懸念材料があり、また株価につきましても色々のご心配、ご迷惑をおかけしてきたことは重々承知しております。我々現役一同は、引き続き先輩諸氏からご協力をいただき、何とか踏ん張って次の

賀詞交歓会開催報告

世話人 長谷川 洋

2014年度新春にあたり賀詞交歓会は、1月17日双日(株)本社会議室に於いて正午より開催された。

寒さ厳しい折にも拘らず、皆様、早くより次々と会場に現れて、早くも談笑の輪が彼方此方にできた。

正午、総合司会の塚本世話人の一声で、幕開けとなる。

司会（MC）は、いつもの小堀裕子さん。

まず、島崎京一会長のご挨拶。スピーチの中で、島崎さん現役時代によく通い詰めた中国、韓国と我が国との関係が良くないのは大変残念だと述べられた。（スピーチ全文は別途掲載）

次に、ご来賓の双日(株)代表取締役・佐藤洋二社長のご挨拶を頂いた。

双日の現況および今後の目指すべきところなどを具に話された。

居並ぶご出席の役員一同のご紹介も頂いた。（スピーチ全文は別途掲載）。

そして当日、88歳ご長寿表彰者の発表とお祝い品の贈呈も行われた。（お名前は別項にて記載）。

さて愈々、新年の“乾杯の儀”。広田雄太郎監事の発声で、宴は開いた。

次々に談笑の輪ができて、さんざめく宴会場となった。

今年は、大先輩のご出席が目立った。敬称略で、丸山修作、三宅 葉、岩井宏一、石沢謙一、河西郁夫、大西 勇、河西良治、大森啓作、大野久生、三分一克美、松本靖史、その他皆様の元気なお姿を拝見しました。

出席者総数 百数十名、出席者名簿（別掲）をご覧ください。

あと半年で、また新年です。ご健勝にてまたのご参加を祈念しております。



2014年新年賀詞交歓会懇親会風景

2014年新年賀詞交歓会懇親会風景



◎ 平成26年 賀詞交歓会 出席者一覧 (2014.1.17 開催)

(敬称略)

ア	青	木	政	和	サ	倉	持	次	雄	マ	長	谷	川	洋	ワ	吉	水	稔
	浅	井	正	彦		栗	田	久	彌		花	澤	和	郎		吉	本	邦
	朝	倉	重	道		小	林	靖	幸		埴	生	榮	勇		渡	辺	重
	甘	利	武	廣		小	林	斉	之		浜	口	信	恭				幸
	荒	木	照	雄		五	女	富	助		浜	地	道	雄				
	池	田	幸	格		月	井	良	造		林	本	義	人				
	池	田	浩	幸		坂	原	悦	司		久	岡	紘	一				
	池	永	通	幸		笹	藤	三	弘		廣	田	雄	太				
	池	本	保	浩		佐	藤	鐵	三		廣	本	昌	郎				
	石	川	一	通		佐	藤	克	郎		深	尾	孝	也				
	石	澤	清	保		分	一	京	雄		福	富	直	明				
	石	原	雄	一		三	谷	哲	美		福	原	昭	二				
	伊	藤	夫	一		洪	崎	好	義		古	家	良	章				
	今	村	昭	昭		島	石	佳	一		星	合	典	彦				
	岩	居	宏	一		白	浦	忠	也		堀	本	登	代				
	岩	田	英	昭		杉	本	宏	治		本	間	洋	務				
	浦	谷	弘	三		須	藤	春	久		本	牧	磐	雄				
	大	北	克	利		陶	山	正	昭		本	樹	俊	生				
	大	久	海	生		曾	我	亨	晃		樹	山	憲	夫				
	大	崎	隆	三		園	山	恒	司		榊	尾	信	次				
	大	塚	静	子		大	工	久	一		榊	村	忠	一				
	大	西	勇	裕		高	原	宏	德		松	本	靖	男				
	大	野	良	太郎		高	尾	春	勝		松	本	史	夫				
	大	野	生	悟		高	木	亨	一		松	本	修	夫				
	大	場	治	一		高	木	允	久		丸	山	甲	作				
	大	平	雄	宏		高	瀬	秀	宏		三	浦	敏	藏				
	大	森	作	彦		高	田	可	子		三	嶋	博	夫				
	大	山	雄	彦		竹	内	眞	能		水	堀	博	勤				
	大	田	隆	久		田	尻	幸	啓		溝	江	三	三				
	小	田	有	次		塚	本	賢	雄		宮	浦	宅	博				
	小	野	賢	稔		津	田	慎	一		三	井	靖	武				
	小	野	郁	夫		利	根	啓	郎		村	上	泰	生				
	河	西	良	治		豊	木	清	喜		村	月	昌	徳				
	河	田	泰	司		豊	福	政	二		望	江	健	児				
	勝	木	順	郎		中	根	舜	行		森	島	国	孝				
	鐸	西	治	勲		中	尾	十	一		矢	武	正	章				
	川	畑	正	已		中	川	正	郎		安	岸	陽	雄				
	川	内	純	一		中	原	和	紀		山	邑	幸	一				
	木	池	省	三		西	村	昭	子		山	本	秀	江				
	木	津	奈	緒		西	村	照	男		吉	海	造	造				
	北	川	幸	雄		西	村	喜	弘		吉	川	浩	浩				
	北	野	秀	明		八	橋	喜	郎									

[双日役員等ご来賓]

土 橋 昭 夫
原 藤 洋 大
佐 段 谷 繁 二
谷 茂 口 真 樹
此 田 良 一
込 山 哲 夫
水 井 雅 弘
喜 多 敏 彦
加 藤 英 明
花 井 正 志
田 中 勤
丸 田 秀
山 田 裕
平 井 龍 太郎
高 濱 悟
伊 地 知 俊 一
青 木 聡 弥

[支援協力者(非会員)]

小 堀 裕 子
増 川 恵 子
今 井 恵 子
六 反 真 智子

出席者合計 155 名

註) *印=長寿表彰対象者(5名)

**=特別参加(非会員)

当会会則第11条の規定により2期分の会費未納者は会員資格喪失となります。

振込先は、下記いずれかを利用して下さい。(振込手数料は各自ご負担願います。)

1) 郵貯銀行

口座番号：00100 - 4 - 318041

口座名義：ニチメン東京社友会

2) 三菱東京UFJ銀行東京営業部

普通口座

口座番号：8225155

口座名義：ニチメン東京社友会 代表 倉又則夫

振込に際しましては、振込者名欄にご自身の名前を最初に左詰めに記載願います。

(ネンカイヒ、ニチメン、XXネンドカイヒ等の記載があると振込者名が通帳に記載されず、振込者が特定できません。)

(註1) 長寿会員は年会費免除になっておりますが、長寿会員からご送金を頂いた場合は当会へのご寄付とみなし処理させていただきます。(会運営上大変助かります)

但し、何らかの手違い等であれば事務所までご連絡下さい。

(註2) 長寿者氏名：(50音順敬称略)：

相原淑、石川勝美、井本公一、岩居宏一、江渕正昭、大野久生、大村譲、柿本寅之助、河西郁夫、門松孝、上条達雄、木内純一、北村俊夫、国領和彦、近藤貞一、斉藤弥、佐藤信世、椎木与志也、鈴木邦治、南部晴雄、西尾敬一、西田啓一、福原昭二、藤田一郎、藤野泰三、古川熙、松尾憲一、丸山修作、三宅葉、宮田信雄、望月昌徳、諸橋良吉、山口富治、山口富美子、山口良孝

以上 35名 (26年度8名を含む)

(註3) 2014年度(2014.7～2015.6) 年会費納入済会員 (50音順敬称略)：

赤澤宏哉、赤間智明、新井清治、新井康友、蟻本守夫、池本俊通、伊藤安雄、今井明、今田時男、岩田功、海野敏夫、浦野由紀夫、大谷毅丈夫、小田有久、小野宗一、小野稔、金井湧二、鎚木順治郎、亀田昭、唐崎和彦、川畑勝四郎、河本吉人、窪田厚三、熊谷信弘、篠塚美郷、島田俊彦、白坂泰之、新藤孝、新野敬一、菅沼利太郎、竹内可能、田所忠彦、塚田尚、土井安之、豊木啓喜、中谷勝、中村昌義、西田昇、西野幸夫、野城恒男、浜地道雄、平井出良彦、平尾龍介、廣瀬一彦、細谷和夫、堀江亘、本間登志雄、前田孝、松崎利夫、松田實、三嶋敏夫、安武国章、八津道夫、若月義和、渡辺一郎、渡辺重幸

以上56名

訃 報

(平成25日12月1日～26年5月31日)

ニチメン東京社友会

	氏 名	出身部門	ご逝去年月日	享 年
1	※中 野 峻 吉	財 務	2013年10月28日	83歳
2	沖 本 達 也	管 理	2013年12月17日	73歳
3	松 田 好 生	元副社長	2014年 1月14日	90歳
4	○高 木 靖 雄	業 務	2014年 1月22日	82歳
5	※加 藤 治 夫	業 務	2014年 1月20日	79歳
6	○山 本 大吉郎	鉄 貿	2014年 1月27日	76歳
7	与 儀 治	機 械	2014年 2月 3日	75歳
8	鈴 木 明	食 料	2014年 3月30日	91歳

ニチメン大阪社友会

	氏 名	出身部門	ご逝去年月日	享 年
1	和 泉 雅 一	機 械	2014年 3月 6日	74歳
2	石 谷 弘 幸	織 維	2014年 4月 1日	71歳
3	子 川 利 夫	機 械	2014年 5月18日	69歳
4	榎 原 茂 樹	業 務	2014年 5月24日	72歳
5	田 中 隆	法 務	平成26年1月25日	87歳
6	土 堂 令 子	総 務	平成26年3月29日	91歳

○元会員

※非会員

ご冥福を、お祈りいたします。合掌



俳句の会「いろは句会」

塚 本 幸 雄

1) 句会の経緯

「いろは句会」は平成元年1月に故太田昭元常務を主宰として発足しましたが今年の5月の句会で第294回を迎えました社友会の同好会として最長寿を誇る会の一つになり会員一同の喜びと毎月の句会にて研鑽に励むよすがとするところでもあります

2) 会員の発表句

過去6ヶ月の発表句から会員が自ら選んだ句を以下に発表することにしました

宇治田薫 選

絵馬を掌に祈願の湯島梅香る
旅立ちも出逢ひもえにし弥生かな
人酔ひの乾通りや花疲れ

久保田悦子 選

行き先の決まらぬままに初化粧
人ひとのお花疲れやひとり酒
さんしょの芽つみて朝餉の支度かな

三枝一希 選

静けさがその気配なり春の雪
セーターの袖口に手を仕舞ひけり
木漏れ日は剪定終へしところより

下川泰子 選

元旦やさりとて思ふこともなし
春一番ドミノ倒しの駐輪車
ひかりうけ煌びやかなり冬紅葉

塚本幸雄 選

街灯の切れたるままにそぞろ寒
波音に合はせ江の電来る小春
春寒し炙るも固き酒肴

藤野徳子 選

花疲れ足袋の小鉤を外しまま
厠へも掛けよと声の初暦
子の名呼ぶ母の声あり冬至風呂

若月義和 選

哮る波遠くに聞きて甲羅酒
行く年や急カーブ切る宅配便
弁慶の目玉むきでる菊花展

以 上

第12回ペトロ会を開催 ～ロンドンからもゲスト参加～

蓮 沼 恒 郎、蛭 田 恒 美

夏を思わせるような汗ばむ陽気となった2014年5月24日（土）正午より、定例となっている（第1回目からずっと）京橋の中国湖南料理店『雪園』にて第12回のペトロ会が開催されました。

『ペトロ会』は、文字通り旧燃エネ本部のOBの集いであり、2003年に昔日を懐かしむ嘗てのオイルマン達が声を掛け合って集まったのを発端として徐々にその輪を広げ現在に至っていますが、設立当初より『会長』は置かず『世話役』のみによって運営を行って来ているところがこの会の一つの特徴といえるでしょう。

『ペトロ会』は年に1回この時期に開催し例年30名前後が参加しており、今回も双日の現役社員（6名）も含む老若27名の出席となりましたが、引き続き、特に若い世代や女性会員の参加が増えるよう心掛けて行きたいと思っています。

「あの時はこうだったね・・・。」「実はこんなことがあったんだよ・・・。」等々回顧談や近況等、話は止まるところを知らずいつも大いに盛り上がる『ペトロ会』ですが、特に今回はロンドンからMrs. Sharon Priceの参加というサプライズもあり、いつも以上に賑やかな会となりました。

Sharonについては、石油関係者以外でも社内でご存知の方が多いと思いますが（特にロンドン店の駐在・出張時色々お世話になった方も少なくないのではないのでしょうか）、1974年から94年まで20年間ロンドン店のバンカーオイルのトレーダーとして活躍してくれました。

今回の訪日では『ペトロ会』に出席するのが大変楽しみだったとのことで、様々なスナップ写真や、石油・ガス部（当時）の職場/部員紹介が掲載されている『月刊ニチメン』（1981年5月号）のコピーまで携えて来てくれ、盛り上がりには花を添えてくれました。

もう忘れかけた英語でのやりとりやスピーチが行き交う中、時間はあっという間に過ぎ、予定時刻を超過して午後3時前に一年後の再開を約し一旦お開きとなりましたが、多くは二次会に幹事さんがセットされていたカフェのコーヒーで酔いを醒ましながらかの続きに花を咲かせ、愈々陽も西に傾く頃漸く散会となった次第です。



第113回「三火会」ゴルフ会

牧 洋 生

この5月20日（火）に「三火会」ゴルフ会が行われますが、「三火会」ゴルフ会として、第113回目になります。これを機会に、「三火会」ゴルフ会につき何か書けとのご要請がアチコチからあり、この会については、既に、平成24年に社友会報に内容載せたのでお断りしていましたが。然るに、113回にもなるので、改めて何か書いて欲しいと再三のご要望があり、それでは前回の社友会掲載内容と同じになるが、それ以降、多少変わった事を付け加える形で、茲許、ご紹介させていただきます。

沿 革

「三火会」ゴルフ会は、今年5月20日（火）開催を以って第113回開催となります。

雪や大嵐の悪天候やら、先般の東日本大震災で自粛した事もあり、（実際には、交通機関が全て止まってしまったこともあり、）ゴルフ開催が中止になったのは、過去5回ほどありましたか？又、一旦は、プレーしながら、プレー中に台風の如き列風や雨が吹き募り、途中で止めたことも3度ほどありました。それでも、毎月第3火曜日に月例会を、大宮の“ノーザンCC 錦ヶ原ゴルフ場さくらコース”に決めて、今年の5月で113回となった次第です。

「三火会」ゴルフ会は、正式には、2005年（平成16年）1月から始まりました。途中、中止になったのも含めて第113回ですから、毎年12回ご案内出したとして、既に、10年目に入っています。

記録を調べて見ますと、最初は海外から帰国して程ない小生と、今は亡き廣田孝夫、三分一克美、中原正紀、松浦淳さんに水庫博夫、福島知二さんに今は亡き栃木良雄さん等が、2003年（平成15年）の6月頃から、三々五々集まって大宮のノーザンCC 錦ヶ原ゴルフ場でゴルフをし始めたのが始まりです。

当時は、特に、毎月でもなく、又、第3火曜日に決めてゴルフした訳ではありませんでした。

発起メンバーの廣田、三分一、中原（後に独立して公認会計士になった）さんに牧の4人は、ニチメン旧経理部（財務部）出身者でした。

ノーザンCC 錦ヶ原ゴルフ場に決めた理由は、廣田さんが、浦和に住んでいて近いのと東大出身の同僚とノーザンCC 錦ヶ原ゴルフ場で時々ゴルフやってたので身近に感じていたこと、三分一さんも自宅に近いこと、プレー代が手頃なことなどでした。とは言っても、湘南地区の大船に住む小生は、埼玉の大宮に電車で通うのに苦労しましたが、湘南新宿ラインが開通して助かりました。

「三火会」ゴルフ会で決めている要項

- 1) ゴルフによる各自の健康維持を目指す。（ゴルフする事により自分の健康度を検証したい。）
- 2) 参加会員間の（当時は、未だ会員と言う組織ではありませんでしたが）親睦をはかる。
- 3) 毎月定時期にゴルフする。それにより、自分のゴルフの研鑽度を確認出来る。
- 4) その為、出来るだけ余分な費用が掛からない処を選ぶ。
- 5) ゴルフ場での全ての出来ごとは、自己責任であることを納得して参加する。
- 6) ゴルフの後、所謂19番ホールとしてゴルフ反省会を中心に懇親会を開催する。

但し、参加、不参加は各自自由。（三浦甲藏さんが、眼が悪い為ゴルフは参加しないが、19番ホールの幹事としてアレンジし、又、クラブへの予約窓口の幹事として参加してます。19番ホールは、今は、志木の笑笑（わらわら）でやっていますが、三火会結成までは、タクシーで志木の華屋与兵衛などに行っていました。これは、廣田さんが華屋与兵衛が握り寿司の元祖と言う事もあり、その寿司が気に入っていた為です。その後は、最近まで志木駅南口近くの和民でやっていましたが、廃業となり笑笑にしました。）

以上の様なことを基本決めとして、始めた次第です。

それ以前、2003年（平成15年）6月～2004年（平成16年）も、毎月ゴルフやっていましたが、決めた日ではなく、参加者も上記5人ではなく、2005年2月頃からは、倉又則夫さん、水庫博夫さん、栃木良雄さん等もジョインしてやっていました。

「三火会」定期ゴルフ会発足

正式に「三火会」としてゴルフし出したのは、2005年（平成16年）1月からです。

その後は、毎月定期的に第3火曜日にゴルフする事にして、実際、今もって続いています。

その際、

- 7) 「三火会」と命名。（毎月、第3火曜日に開催するのと、出来るだけ前広に「参加」して貰おうと言う意味の語呂合わせです。それと、日にちを決めておくと、予定が組み易いからです。）
- 8) 参加者を呼び掛けるなら、旧NMの特定の部課に拘わらず色々な部課出身の人々に参加して貰おう。更に、海外のカントリークラブスタイルにして、家族や友人にも来て貰おうということにしました。餘野木茂幹事の呼び掛けにより、鉄鋼部とかプラント部等、従来多かった合樹・化学品部以外の部課の人が「三火会」に入って貰いました。
- 9) ゴルフ場は、ノーザンcc錦ヶ原ゴルフ場の正式コース“さくらコース”としました。
- 10) ゴルフは、クラブの指定する隠しホールに則り新ペリア方式を採用することとし、そのハンディキャップをベースに成績表を出して、プレー後参加者に配布。或いは、後日、（当日、欠席者にも）メールでお知らせしています。
- 11) 会費は、特に無く、当日のゴルフに参加したものが、300円/人を各自払い、それを積み立てて、年末に「大納会」やり、一年の成績に基づいた賞を出す事になっています。

この企画幹事には、栗田、倉又さんがその任に当たっています。

従い、何処の部課の方でも、又、家族の方や友人でも参加出来ると云うものです。

これにより、現在の「三火会」は、奥様やご家族も一緒にゴルフしていますし、行く行くは、先輩の奥様や娘さん、更にお友達も参加も期待しています。

現在の会員

現在の「三火会」会員は、下記表の通りです。奥様も入れて23名です。

この中、毎月の常連は、10～15名で、3～4組位でプレーしています。

因みに、現在の登録会員は、（敬称略、アイウエオ順、過去一度でも参加した会員）

池田格、大村健太郎、勝田泰司、金城弘明、倉又則夫、栗田久彌、三枝伸、櫻井潤一、

三分一克美、篠塚美郷、関口比左志、竹内可能、中原正紀、成見純子、西田昇、日原東洋、牧洋生、松浦淳、松壽多賀司、水庫博夫、餘野木茂、同恭子、三浦甲藏（但し、ゴルフプレーはしない。クラブ側折衝と反省会アレンジ）…太字は幹事

この中、倉又、三分一、篠塚、西田、水庫氏は、最近、体調崩したり、或いは都合で、参加されるのが少なくなりましたが、復調し、都合つけば、出て来られるものと思います。

「三火会」での物故者

かくして、「三火会」は、現在も毎月やっていますが、「三火会」発起人の一人である廣田孝夫さんが2010年亡くなり、栃木良雄さんが2011年亡くなり、その前の2006年には鉄鋼部の河口輝夫さんが亡くなられ、我々も毎年年をとって来るとは言え寂しい限りです。

「三火会」ゴルフレベル

以前は、「三火会」のゴルフが、コンペでもなく遊び中心でもあり（今でもそうだが）、又、年取った会員が多いので、スコアは、全体的に低レベルでしたが、餘野木、竹内、関口さんに松壽さん達が、常時加わる事に依り、一気にレベルアップし、特に松壽さんは、グロスでパープレーに近いスコアで回るので、上記の諸兄を始めスコアは可也レベルアップしました。

一方、最近80歳近く、或いは80歳以上の諸兄も出始めているので、一般の白ティーでなく、シルバーティーでティーアップすることも考えています。4月に行った「化工OB会」では、参加者全員シルバーティープレーしましたが、矢張り可也気が楽です。

「三火会」ゴルフ所感

上記の様な次第で、毎月ゴルフを楽しんでいます。ノーザンcc錦ヶ原ゴルフ場は、確かに河原ゴルフ場で、コンペに慣れた箱庭風の日本のゴルフ場とは環境が違います。でも、このゴルフ場も、元々は、日東興業の大宮地区では秀逸のゴルフ場であり、一方、ゴルフ発祥のイギリスのリンクスコース、それは、海岸に沿った地域にあり、冷たい強風が吹き、樹木も無い殺風景な風景の中で、コース外れば灌木状のヒースは繁り、深いバンカーはそこら中にあり、その癖、ゴルフをやる愛好家にとっては一度はやって見たい垂涎の的たるリンクスコースに比べれば天国の様なゴルフ場です。

羊飼いの球打ちから始まったゴルフは、英国で、貴族を中心とするゴルフになり、その後アメリカでスポーツ競技になり（現在、日経新聞の“私の履歴書”でトム・ワトソンが競技の模様を描いていますが、・・・）、戦後、日本では会社の内外で行うコンペになりました。日本では、箱庭の如きゴルフ設計が基本となり、至れりつくせりのゴルフ場となり、我々も其れに慣れ親しんでいます。

然し、「三火会」は、敢えて、これ等の箱庭風ゴルフコースとコンペ方式採っていません。イギリスのオールドコースでやっている積りでゴルフしていると思えば、ノーザンccゴルフ場も、結構楽しいものです。

但し、このゴルフ場は、キャディーがなく、バギー車で移動します。年をとり目が悪くなっている小生とか、オールドプレイヤーにとっては、打ったボールの行方が、見辛くなり多少しんどいですが、此れも、昔、英国でゴルフが確立し、ゴルフプレー発端であるマッチプレーが行われるまでは、キャディーなどなかったことを思えば我慢出来ます。

「三火会」申し込み

「三火会」内容は、以上ですが、是非共、「三火会」ゴルフに気軽に参加される事をお待ちしております。

幹事なり「三火会」会員の何れかに事前に電話なりメールなり、Faxで連絡頂ければ結構です。後は、毎月のゴルフ会にご案内します。

参加を歓迎します。下記の何れの幹事でも構いません故申し込んで下さい。）

「三火会」	代表幹事	牧 洋生 (33年入社 合成樹脂部出身)
	幹 事	栗田 久彌 (33年入社 化学品部出身)
	幹 事	倉又 則夫 (33年入社 プラント部出身)
	幹 事	餘野木 茂 (35年入社 鉄鋼、合樹出身)
	幹 事	金城 弘明 (35年入社 鉄鋼部出身)
	幹 事	三浦 甲藏 (35年入社 経理部出身)



松浦 淳
三枝 伸

竹内 可能
牧 洋生

栗田 久彌
金城 弘明

成見 純子

日原 東洋

ノーザンカントリー倶楽部錦ヶ原GC

三火会平成26年5月例会

2014年5月20日(火)

ニチメン大阪MCS会

川 西 勲

1968年、海外勤務を終えて、大阪の産業機械課に戻り、机を並べていた皆様と2011年になって何十年ぶりに大阪MCS会を立ち上げて、今年で四回目となる。

会うたびに次から次に往時の思い出話に花が咲き、懐かしく語り合い、気持ちだけでも若返る。

それぞれ海外の任地が異なるので、駐在時の面白い話も、苦労話も、今となってはすべて楽しい思い出として聞ける。

辻井準一さんのカラカス、ソウル、ホーチミン（旧サイゴン）、シカゴでのとっておきのお話、澤田太郎さんもコロombo、パリ、ホーチミン（旧サイゴン）そしてモスクワ、小説が書けそうな物語など。

その他の面々もご同様です。

今回も、なんと88歳の辻井さん、澤田さんのお二人は、京都、神戸から遠路お越しになられた。

会場の東伊豆・伊東温泉ホテル暖香園の女将は、昔々の映画女優で御影京子といい、東映京都撮影所で大川橋蔵、東千代介の相手役として何本かの映画出演をしている。

宴会の時には、和服姿もあでやかな女将が挨拶に現れた。さすが元女優。

美味なる料理、お酒に「錦上花を添える」は言い過ぎか。

この暖香園、なぜか長谷川さんの紹介で、行くことになった。さて、来年は何処になるか楽しみだ。一年のたつのは実に早い。元気にまたの再会を期して、相模湾を右手に見て熱海経由で帰路についた。



【写真】 左から、広本昌也、泉 伸夫、林 義人、辻井準一、澤田太郎、長谷川洋、本田務、川西 勲。

第9回 ニチメン機友会 開催のご案内

日 時 2014年10月18日（土） 12：00～14：00

会 場 アルカディア市ヶ谷（私学会館）
※ 昨年開催会場八重洲富士屋ホテルから変更になります
住所 東京都千代田区九段北4-2-25

会 費 男：7,000円
女：5,000円

元東京自動車部/元航空機部 監事：糸川 良平 TEL090-2453-6298

ニチメン東京化工OB会 開催のご案内

日 時 10月17日（金）、18：00～

会 場 『レストラン東洋』（日本橋交差点至近）

幹 事 栗田久彌 TEL. 048-473-3339

東日本大震災による震災遺児への義捐金

会新年会では、ワンコイン募金（500円以上）の呼びかけに賛同戴きありがとうございました。

集まった義捐金（29,118円）に予備費を加え、あしなが育英会の“あしなが東北レインボーハウス建設募金”へ10万円を寄付いたしました。

本年度も、引き続きあしなが育英会への寄付を継続いたしたいと考えております。

新年会当日、会場にて改めて会員各位へ寄付をお願いいたします。

皆様のご協力をよろしくお願いいたします。

nmosnmos 大阪社友会ニュース nmosnmos

平成26年 新年互礼会 開催ご報告

山 邑 陽 一

平成26年新年互礼会は、1月9日に、当日配布の下記式次第どおりに、例年どおり太閤園にて行われました。ご出席は157名、うち10名が双日株式会社からの来賓でした。また、米寿のお祝いの対象会員は、東忠・池島幹生・井上精一・岩田録士郎・大谷房太郎・岡崎良治・国武貞敏・佐草茂男・高間敬三の皆様(うち4名がご出席)でした。なお、白寿のお祝いの対象会員はおられませんでした。

宴会は例年どおり多数の会員が参加して、新年の華やいだ雰囲気の中で盛大に行われました。今年とはくに、井上裕会員ご一行のご好意で日本古典芸能が披露され、尺八などによる雅楽の調べにじっと聴き入っておられた会員もありましたが、多くの会員が歓談しながら食べたり飲んだり聴いたり、短い時間を精一杯楽しんでおられました。下記のうち、会長挨拶・来賓挨拶・長寿者の代表答礼および当日の会場の模様については、以下本文中の記事および写真をご覧ください。

司会進行 関岡世話人代表

会長年頭挨拶：林 靖 会長

長寿のお祝い：米寿のお祝い会員 9名

代 表 答 礼：佐草 茂男 様

来 賓 ご 挨 拶：双日株式会社代表取締役専務 茂木良夫様

宴 会

乾 杯：音頭発声 井上精一様

日本古典芸能ご披露 井上 裕様とお仲間ご一行

中締め：林喜久雄副会長

閉 会



*** 会 長 挨 拶 ***

会長 林 靖

皆さん、新年あけましておめでとうございます。会長の林 靖でございます。新年を寿ぎ、一言年頭のご挨拶を申し上げます。

本日は、「平成26年度ニチメン大阪社友会新年互礼会」をご案内いたしましたところ、皆様には大変お寒い中を、お元気にて、ご参加くださいますこと誠にありがとうございます。

また、双日ご本社からは、年頭の大変お忙しい中、わざわざ東京から、代表取締役副会長・原(はら) 大(たかし)様を始め、代表取締役専務・茂木良夫様、特別顧問・土橋昭夫様他、多数の役員幹部の皆様方に、ご参加をいただき厚く感謝申し上げます。

さて、本年度も例年通り、ニチメン実業ゆかりの昔懐かしい太閤園にて新年互礼会を開催することが出来ました。

只今、関岡世話人代表からご報告の通り、本日のご出席は174名となりました。12月の中旬の集計では120名程度でしたが、このように多数の皆さんにお元気にて参加いただき、誠に盛況となりました。特に始めてのご参加の方や、女性の方々が多くご参加いただき大変喜ばしく思っております。

どうぞ、皆様方にはごゆっくり新年の賀詞交歓をお楽しみください。

なお、此の後、ご案内の通り、本年めでたく、88歳の米寿をお迎えになられます9名の皆様方に対し、お祝いの

セレモニーを予定しております。受章されます方々には、心からお慶びを申し上げますとともに、これからもますますお元気にてお過ごしくださいますようご祈念申し上げます。

さて、本年度はどのような年になるでしょうか。今年のお正月は元旦早々晴天に恵まれ、三田に住んでおります私も、六甲山の頂上から現れた実に美しい初日の出を拝むことが出来ました。皆様もこの一週間の晴天の中で、穏やかなお正月をお過ごしになられたこととお慶び申し上げます。

今年の干支は、甲午（きのえうま）年であります。皆様の中には九星気学に詳しい方も大勢いらっしゃると思いますが、暦の上では、大変縁起が良い年周りと言われているようであります。

さて、昨年25年度は、安倍政権の下で、アベノミクスによる政治主導が功を奏し、オリンピック招致を始め、明るい話題が多くあり、我が国も久しぶりに自信を取り戻したような一年でございました。日経平均も年初の予想を大幅に上回り、ついには大納会において前年対比56%アップの高値を付けました。

本年度につきましても、日経ほか各紙ともに、各企業トップの大変強気な年頭挨拶を報じております。一方、4月の消費税率の引き上げを始め、日中、日韓の外交摩擦など難題山積でございますが、正に縁起の良い午年に因んで、是非とも、経済再生、景気回復と共に、平和な社会を目指した一年であって欲しいものであります。

さて、ニチメン大阪社友会の活動でございますが、先の総会にてご承認いただきました新役員体制にて、順調に事業を進捗しております。引き続き、ご支援くださいますようお願い申し上げます。

尚、本日は新年互礼会を賑やかにいたすべく、会員による余興を用意しました。ご歓談の合間にご披露をいたしますのでお楽しみください。

会員の皆様には、日頃何かと生涯学習を楽しんでおられることと存じます。既に、絵画、写真や囲碁、ウォーキングなどについては社友会として応援事業を行ってききましたが、加えて、楽器演奏や歌謡、詩吟、民謡、などについても会員の集まる場において発表の機会があっても良いのではないかと思います。

なお、新年早々の囲碁の集いを、1月20日(月)に開催します。ニチメン囲碁部の高段者が丁寧に指導しますので、初心の方も是非参加いただき体験のチャンスとなさって頂きたいと存じます。

以上、終わりにになりましたが、双日株式会社様のますますのご発展と、本日ご参加いただきました皆様方のご活躍と御健勝をご祈念申し上げ、新年のご挨拶とさせていただきます。

*** 白寿・米寿お祝い授与に対する返礼の辞 ***

佐 草 茂 男



——この調子が続いていくのでしょうか？

その鍵となるのは、わたくし、いろいろ雑誌などを読んでいますと、個人消費と輸出の動向で御座います。この二つが2014年の景気の動向を左右すると言うような記事がございました。昨年来、株高などがあり、お金持ちの方はいろいろ、宝飾品とか、ブランドなどを買って、消費を増やした訳であって、また、住宅建設の駆け込み需要なんかも進んでおりました。今後、自動車とか耐久消費財、こう言った需要も続いて、比較的高めの成長が続くものではないかと思われています。個人消費に続いて、もう一つ日本の景気の鍵になりますのは、輸出の動向でございます。海外を見てみますと、アメリカを筆頭に海外の景気改善が見込まれております。一方、円安で輸出採算が、輸出がやり易くなっている状態になっておりまして、この輸出が伸びて行けば日本の経済の活性化に繋がって行くものと思っております。このように、今年は、個人消費と輸出、この二つが順調に伸びることが期待されておまして、このような環境で、我々は生きていかななくては行けない訳であります。

個々の我々、個人にとっては、申すまでもなく、健康というものが第一で御座います。私は、健康の維持のためには、規則正しい生活というのが、先ず、第一ではないかと思って実行している訳ではございますけれども、朝起きる時間、食事の時間、寝る時間など、規則正しく毎日を送るべきではないかと思って、これが長寿の秘訣かなと思っておる訳で御座います。今年は午の年であります。馬の様に、元気に、逞しく今年を生き抜こうではございませんか？

簡単では御座いますけれども、祝宴のご挨拶とさせていただきます。皆様方のご健康を祈念し、ご挨拶とさせていただきます。有難うございました。

（編集の都合上、前半を省略させていただきました）

【大阪社友会ホームページより抜粋】

ミステリ小説断想

福 富 直 明



あれこれ30年、海外のミステリ小説の評論やエッセイを書いてきた。会社勤めをしながらやってきたのだが、こういう副業をしているのが知れると、会社の仕事もやっているのにねといった嫌味を言う奴が必ずいる。(M君、きみのことだぞ)

1 老化する主人公たち

海外の推理作家の息の長いシリーズを読んでいて気がついたのは、作家たちが一作目か二作目ぐらいで主人公の年齢を書いてしまっていることだ。そのときは、まだ、支障は生じない。作家たちにしても、人物造形上の必要から年格好を決めたのだろうが、作品が好評で、長年にわたるシリーズとなると、年齢が問題になる。

エド・マクベイン、ロバート・B・パーカー、ブライアン・フリーマントルらのシリーズで、たった一度だけ作家がうっかりと明記した主人公の年齢をまともに受けて、あとき37歳だったら、この作品では何歳になっているはずだと考えると、おかしいことになってくる。作者たちにすれば、自分のシリーズが20年も続くシリーズになるとは——なればいいなと思っていたにしても——初期の段階では予想していなかったから、年齢をはっきりと書いてしまったわけだ。

英国作家のレジナルド・ヒルの場合は、主人公のダルジュール警視の履歴を細かくつかめていなかったと見えて、彼の年齢を話題にしたら困ったような顔をした。彼の作品を読むと警視が女房といつ別れたのか明確でないし、別れてから、また、よりを戻したのかと思われる節がある。マイクル・ディブディンの主人公は作者自身として大体同年齢だが、意識的にぼかしていると認めており、日本の作家にも一作で一年ぐらい加齢するのを目安にしている人もいて、いずれも、大シリーズを造る構想を持っているように思われる。

主人公を34歳から40歳にするのに、45冊かけた

作家もいる。この人は、ある時期から自分の登場人物たちの高齢化問題に気づいて、年齢についてはふれないようになった。そうは言っても、彼の作風はいつも春夏秋冬がはっきり描かれていて、時間の推移が明確なのだから、カレンダーと乖離して登場人物たちの老化だけが遅れている形になった。

幸いにして、主人公たちの老化の進行を気にしながら読むような読者はさして多くない。要するに熱心な読者なのだから、作者としては、小うるさい指摘とは思わず、手ごたえがあったと喜ぶべきだろう。

丹念に読めば、長編大シリーズに初めから登場していた刑事やスパイは今や高齢化し、刑事部屋はまるで老人ホーム、彼らの話題は介護保険なのではないかということになりそうだ。

そう言えば、E・S・ガードナーのペリー・メースンは80冊を越えるシリーズの主人公だったが、彼は何歳から何歳まで現役で活躍したのだろう。調べてみるには作品が多すぎる。

2 有名な犯人たち

推理小説の愛読者には、釈迦に説法になるが、犯人やトリックは未読の人には他言してはならないとされている。

古本屋で買った翻訳物の冒頭の登場人物のリストに「これが犯人→」と書き込んであったとか、ロンドンで超ロングランのクリスティー原作の舞台劇『ねずみとり』を観に劇場にタクシーで行って、降りぎわにチップをけちったらタクシーの運転手が「この芝居の犯人はね……」と意地悪をしたとか聞くが、たぶん、ジョークだと思う。

この守秘ルールのおかげで、書評や作品紹介をするときに、奥歯に物が挟まったような言い方でしか筋にふれることが出来ない。作品の本質的なものに言及しようとする、そう言っているわけにも行かず、“警告！ この後、トリックに言及します。未読の方は次の段落をひとつ読み飛ばして下さい”といった注記が必要になってくる。私もあとがきの解説の中で、犯行の動機がその土地の時代背景に密接に結びついているものであるのを

説明する必要に迫られて、その十数行だけを上下逆さまに印刷してもらったことがある。校正の人は、そんなことしたって、読む人は読むさと言っていたと聞いたが、逆さに印刷すると意外に読みにくいので、かなり効果的な方法だと思っている。

映画の「猿の惑星」を初めて観たときは、あの結末がショッキングだったが、今ではあれがどの惑星の出来事か知れわたっているの、まだ観ていない人に、結末にふれずに筋を説明してあげるような気配りはなくなったようだが、あの映画と同様、古典的なミステリ作品にも、もう誰でも犯人を知っていて、いまさら、評論やエッセイで隠しても大した意味がなさそうなものがある。たとえば「モルグ街の殺人」。それから、クリスティーの『アクロイド殺し』も、ちょっとでも推理小説を読んだ人なら、この作品をまだ読んでいなくても、誰が犯人か知っている。有名になりすぎたばかりに、いまどき、あの小説を読んで、あっと驚ける人は珍しい存在なのではないか。クリスティーの作品には、逆に犯人でなかったのは誰だったかと考えたくなるものがあるが、これもプロットが有名になりすぎたせいだ。

グレーム・グリーン『第三の男』も、ハリー・ライムの死んだ現場に、居合わせた友人二人のほかにもう一人、三人目の男がいたことが謎の証のはずだったが、オーソン・ウェルズの名演というか怪演というか、暗闇に浮かび出た、人を食ったようなあの笑顔の印象が強烈すぎて、ハリー・ライムが本当は死んでいないのが知れわたってしまった。

かねがね面白いなと思っているのは、ダシール・ハメットの『マルタの鷹』のサム・スペードの相棒であるマイルズ・アーチャーを殺した犯人の扱いである。ハメットの小説では最後まで伏せてあって、〈意外な結末〉の一つになっている。しかし、ハメットが自分のよく知っているサンフランシスコの界隈を背景にして、ストーリーの名前をはっきり書いたので、アーチャーが射殺されたのはこの地点と推定できる結果になり、そこには「アーチャーが××××（フルネーム）に殺されたのはこの地点である」と書いた銘板があるという。この犯人はハリー・ライムほど有名ではないから、ここでも名前を伏せておくが、犯人の名をはっきりばらした銘板をファンが作ってしまったのだ。

マクベインの小説に「包丁をふりかざしてマー

ティン・バルサムに襲いかかるアンソニーパーキンスみたいに……」という比喩がでてきて、これでは、ヒッチコックの『サイコ』のネタばらしじゃないかと思ったが、なにせ1960年の映画だし、いまさらヒッチコック映画を見ようと思う人なら話の筋は先刻御存知のはずはずだろ、構わないさといった理屈らしい。

この手の話の極め付きは、チャンドラーの『さらば愛しき女よ』の1944年映画化作品の邦題だ。見そこねた映画だが、88年に輸入公開された時の邦題が「プロンドの殺人者」。つまり、観る前に題名を聴いただけで、犯人がわかってしまう邦題だった。

3 題名の話

何年前かに『ビッグ・トラブル』という邦題の翻訳ミステリが2冊、ほぼ同時に書店に並んだ。たしか奥付は一日違い、作者は違うし、一冊は原題をそのまま邦題にし、もう一冊は前置詞のついた“イン・ビッグ・トラブル”が原題。よく似た原題の版權を取ったからといって、出版社の間で事前に相談するわけにも行くまいが、野次馬としては、同じ題名で同時に出たのがおかしい。1、2ヶ月の差があれば違う題名になっていたはずだ。同じ題名のせいで、どちらかが得したのか、損したのか。原作者にすれば間違っても買ってもらっても、あまり嬉しくはあるまい。

テレビの番組表で映画の「脱出」が放映されると知って、ボガードとバコールのあの映画を久しぶりに見られるぞと思っていたら、ジョン・ヴォイト主演の全然違う映画だった。

ある集まりで、『赤毛のストレーガ』というハードボイルド作品が話題になり、それなら読んでみよう、書店でみつけて、結構、面白くて終りまで読んだが、途中でそれが違う作者の『赤毛のカーロッタ奮闘する』だったのに気がついた。そう言えば、真保裕一さんの『ホワイต์アウト』に対して、翻訳物に『ホワイต์・アウト』があるし、『眠り猫』に対して『眠れる犬』もある。『斧』という題のミステリは、1964年に訳出されたマクベインの作品と2001年に邦訳の出たウェストレイクのものがある。この2冊の『斧』の場合、原題の違いは定冠詞の有無だ。

マクベインはT・S・エリオットの詩にでてくる“虎の穴”を新作の題名にするつもりでいたのに、映画にもなった『蛇の穴』が先に出版されてしまっ

たので、題名を変更したという。マクベインが1974年に『黄金の街』と題するジャズ小説を書いたら、1986年になって同じ題名のボクサー物の映画が作られた。彼にすれば、気に食わなかったらしく、映画の「黄金の街」を観てきた夫婦を88年の自作に登場させ、映画館からの帰途、小説や映画の題名は著作権があるかないかと口喧嘩をする場面を描いている。

銀座の某書店は、クリストファー・ニューの小説『香港』を政治情勢や時事問題の本を並べた棚に置いていた。店員さん、中身を見ずに題名だけで整理していると思ったら、その後、ジェームズ・エルロイの『アメリカン・タブロイド』も同じ棚に置いてあるので、ひょっとすると、小説であるのを承知でこの棚に置いてある、かくしんはんてきな手口かも知れないと思い直した。確かに2作品とも、政治情勢の裏話的なエピソードがたっぷり入っている。案外、勉強家の店員さんなのかも知れない。

同じ題名のミステリが2冊ほぼ同時に出版されたことにふれたが、同時に出したのがめずらしいので、書かれた時期が違うが同じ題名だった例は幾らでもある。

コリン・デクスターの『オックスフォード運河の殺人』とフレドリック・ブラウンの『B・ガール』の原題は両方とも The Wench Is Dead である。A・J・ヒュービンのビブリオグラフィを見たら、もう一冊、未訳の作家の物がある。3度も出てくると、偶然の一致とは思えない。どこかに出典があるのではと、引用辞典を調べると、16世紀の戯曲作家クリストファー・マーロウの作品にある台詞だった。

Deadlier Than the Male という題の映画も2本ある。一つは英国のブルドッグ・ドラモンド物、もう一つはジュリアン・デュヴィヴィエの「殺意の瞬間」のアメリカでの題名だった。ヒュービンの本を見ると、この題のミステリ小説は5冊もある。こんな妙な言い回し（“男よりも恐ろしい”、つまり女はこわいの意味）が7回も出てくるのは、出典があるに違いない。調べてみたらR・キプリングの言葉のパラフレーズだった。

同じ題名が何度も出てきたら、何かの引用ではないかと考えるべしということになるようだ。そう言えば、我が国のミステリ小説でも、西行の“花の下にて春死なむ”を題名にした作品が2つ

あったと思う。ミステリではないが、1967年に書かれた『失楽園』と同題の本もあったっけ。

同じ題の小説とはどれ位あるものかと面白くなって、ヒュービンの本をあちこち拾い読みする。B級のノワール映画のタイトルにありそうな『夜の恐怖』(Terror by Night) は邦訳はないが10作品もあり、出典は——学生時代にこんなに好奇心をもって勉強しときゃよかった——旧約の詩編中の言葉だった。

出典を探るのは面白い作業である。もっとも、翻訳を生業とする人たちには、出典のある語句は危険きわまりない代物で、見落とすと、ひところはやった言い方を借りれば“地雷を踏む”結果になりかねない。さりとて、数語の出典を確かめるのに何十分もかけていては、実入りにさしつかえる。

Fall Guy (『身代り』) という題を使った作家は12人、Woman in Case (『事件の女』) が8人『××への旅』(Journey into ……) が14冊、イアン・フレミングの『黄金の銃を持つ男』The Man with the Golden GunやP・クエンティンの『2人の妻をもつ男』The Man with Two Wives のようにThe Man with ……で始まるタイトルのミステリにいたっては、実に100冊を越える。似たような題名がこれほど多いとは、ミステリ作家って、案外、想像力に限界があるのかなという気がしてくる。

エド・マクベインの87分署シリーズにマイヤー・マイヤーという姓と名が同じ刑事が出てくる。父親が彼にこんな名前をつけた由来や、彼の名前を聞いた登場人物の反応から、読者もこれがいかに非常識な、あり得ない名前であるか、よく解るのだが、1967年に純文芸作家のヘレン・ハドスンが『マイヤー・マイヤー』と題する小説を発表した。この小説のおかげで、刑事の方のマイヤーは同僚にからかわれるはめになり、おれの方が先だぞと溜息をつくのがおかしい。ハドスンの小説を読んでもみると、こっちのマイヤーは歴史の教授で、刑事ではないし、命名の由来は一言も説明されておらず、ユダヤ系という以外は、容貌も性格も全く似ているところがなく、へんな名前だねと話題になることもない。

ハドスンがマクベインの小説を意識している気配はないし、87分署シリーズなるものの存在すら知らなかったのではないかとと思われるから、どうして『マイヤー・マイヤー』になったのか不思議な暗合である。

4 季節感

映画「カサブランカ」の結末の場面で、霧の空港にハンフリー・ボガードが、トレンチ・コートを着て現れる。これを観た高名な映画評論家が、暑いアフリカでトレンチ・コートを着るとはと評したという。ハリウッド映画の御都合主義的な作りを批判した言葉らしいが、私は、そうか、ボガードってあの恰好が似合う俳優だなぐらいしか思っていなかったもので、評論家の指摘の鋭さに驚いた。

ところが、三省堂の『世界の国ハンドブック』によるとカサブランカの最低気温は-2.7度(1月)と載っている。一方、映画の脚本を読むと「1941年12月のカサブランカで」という台詞が出てくる。これなら、トレンチ・コートを着ていてもおかしくない気温で、一応、季節にも目配りして作られている点は認めねばなるまい。

『怪人二十面相』と『少年探偵団』を再読。前に読んだのは昭和10年代で、そのころ子供であった世代にとって、これらの小説を読むのは通過儀礼のようなものだったと思う。同期会で集ったら、少年時代に江戸川乱歩を読んだ奴は手を挙げてくれと統計を取ってみたいところだ。ともかく、こわい小説だった。「みなさん、自分の影が齒をむきだして笑ったところを想像してごらんなさい」といった、読者に語りかける文体も効果的だったし、次から次に起る意外な展開に引き込まれた。

もう一度読んでみようと思ったのは、この2つの小説がどの季節を舞台にしたものだったのか、どうしても思い出せなかったからである。怪人二十面相が池に潜って、追っ手をやり過ごす場面は、はっきり憶えている。これは暖かい季節であるような気がする。薄氷のはった真冬の池だったら、さすがの怪人だって水に潜るのはためらったのではないか。

小林少年と緑ちゃんが地下室で水責めにあう。(あの小林君、学校に行かなくてもよかったのか?) 水が増えてくるこわさは憶えているが、凍えるほどの冷たさだったのか、あまり冷たくなかったのか思い出せない。

田舎屋敷に向かう雪の足跡が1つしかないのに、主人が短剣で背中を刺されていたとか、真夏の室内に暖房がかかっているところで死体が発見されたといった筋だと、季節の描写は不可欠だ。プロットと関係はないにしても、小説である以上、季節感はほしい。

旧ソ連の時代、初めてモスクワを訪れるのが冬

場か夏場か(特に初夏)によって、ソ連感が変わってくると聞かされた。初夏のモスクワはそれほど快適な所らしい。

英国作家の人気シリーズで、主人公のスパイがモスクワに6ヶ月間亡命する。ところが、それが何月から何月までの6ヶ月だったのか、さっぱり解らないのだ。夏をはさんだ6ヶ月なら、快適な気候を描いて当然だし、冬場なら毛皮の帽子や防寒具なしに外出できないが、この作家は季節に全く言及しない。河沿いの道を女と散歩する場面があるが、風物描写は皆無。真冬だったら、そんな散歩は不自然だし、スパイの密会としては目立ち過ぎる。こう突き詰めて行くと、意外にリアリティに欠けたプロットだと思えてくるが、逆説的に言えば、季節感を盛り込まずとも、小説は成立すると証明しているかのようだ。

『怪人二十面相』と『少年探偵団』に話を戻すと、前者で怪人が池に潜ったのは「秋の10月、それほど寒い季節ではありません」という記述があり、12月1日と推定される日の明智との対決では「二十面相のひたいには、この寒いのに、汗の玉がういていました」とある。

後者の小林少年たちの水責めについては「春とはいっても、水の中は身もこおるほどのつめたさです」と説明されている。

つまり、2作品とも、季節ははっきりと設定されているものの、季節感を強調する表現はきわめて少ない。だから、季節感が記憶に残っていなかったのだというのが、何10年ぶりかに再読した感想です。



インド雑感－5 （旅日記）

高 尾 勝

約2年前のインド雑感－2に登場したU-氏に誘われ、同行者3名で2年振りにインドを訪れた。

4月12日昼過ぎ成田発、Colomboに向かうべくSri Lanka 航空に搭乗、オイル漏れの由で滑走路から駐機場に舞戻り、約2時間遅れで離陸。未だ明るい宵の口に到着する筈が、当然のことながら、到着時は暗くなっていた。

翌13日9時過ぎにホテルを出て、気温31－32度海浜沿いの道を約2km歩き、U-氏の知り合いの宝飾店を訪れて日本語の上手な50歳位の親父さん、その家族と30分ほど歓談。若い時無一文で日本に行き苦労して秋葉原に店を出すまでになり、引揚げて現在の店を出している由で、その苦労談をいろいろ聞いた。その逞しさに感嘆すると共に、日本人のお客さんの多くが宝石に就いて知識・経験に乏しく、買い物も10－20万円程度の宝石、仕入れ値の10倍くらい儲かったものだ、と云う話しは考えさせられた（資産になるような高額の宝石購入層は確かな知識を持っており手強い、或いは日本人のおおらかなお人好し、を意味する）。

2年前にも感じたことだが、純朴で穏やかだったスリランカが嘗ての悪いインドの小型版になっている、ホテルの下級従業員から煙草をねだられたこと2回、いずれも撥ねつけたが、現在のインドでは斯様なことは無いと云える。日本への帰途、Colomboから隣り合わせになった、名古屋で宝飾店を営んでいる女性も、スリランカ、中国、泰と取引しているがスリランカは誤魔化そうとするので気が許せないとの意見だった。

夕方のSri Lanka 航空便でインドBangaloreに向かい、更に車で1時間半Bangaloreの北西60kmTumkur市に在るU-氏のIT会社の宿舎に入る。

Bangaloreで3泊したが、日中の気温は30度前後。珍しく14日午後激しい雷雨、15日夕方にも雷雨があったが、1－2時間の雨が上がると湿気は殆ど感じられず気温も下がるので快適だった。

Delhi, Mumbai, Chennai, Bangaloreなど旧来のインドの大都市の中心部は都市改造しようにも処置なし、の感じで隣接郊外部が発展しており、Tumkur市もそれに漏れず発展している。地方都市の商店・住居の多くは日干し煉瓦建てゆえ、建物の前面をちょん切れば道路拡幅も容易、多くの道路が拡幅舗装されていたし、市の郊外部には延建坪100坪前後の立派な庭付き戸建て住宅が雨後の筈の如く出現しており一部のインド人が裕福になりつつあることを実感した。

16日午後New Delhiに向かい、出迎えてくれた友人 元住商インド社長の中島さんの案内で4時半頃ホテルに投宿。待ち受けておられたデリー日本婦人ボランティア・グループの代表者松下まゆみさんにガネーシャ会からの寄付金15万円を手交。中島さんが当日の為替レートで、88,300ルピーに換金して松下さんに手交することになった。

因みに、この寄付金は、マザーテレサ医療施設の手術用呼吸管理装置購入費用の一部に充当される予定（ガネーシャ：象面人身坐像で商売の神様：ガネーシャ会は元通産次官、元三井物産副会長山下英明さんなどデリー関係囲碁愛好者数名の会）。

スズキ・マルチ本社工場所在のGurgaon迄空港近辺から約20km、以前は車で約30分だったが、ラッシュアワーで1時間を要した。Gurgaonの日本食店で御馳走になり、中島邸でお茶とデザートを供された。デリーで気温40度は覚悟していたが、sand stormで霏がかかっており、其の為か気温も高くなかった。

17日昼頃デリーを発ちDharamsalaに向かう、飛行機は民間航空会社Spice JetのBombardier Q400双発プロペラ機でデリーから約1時間半の飛翔。プロペラ機ゆえ飛行高度は3－4千米だと思うがDelhi上空の霏の厚さもその程度、Dharamsalaに向かうにつれ霏も消えた。DharamsalaはKashmirの南東、雪を頂くヒマラヤ山脈を越えればチベットに繋がる溪谷の地で海拔1400米、チベット亡命政府の所在地。

チベット人は平地部には少なく、日光のいろは坂は及びもつかない、はらすような急峻な狭い山道を登ったUP Dharamsalaと称する峻険な山の頂上部から麓にかけて棲みついている。平地部との高度差は400－500米程度であろうか。在印チベット人約15万人の内、4万5千人がこの地に住む。Dalai Lama14世のインド亡命は1959年、チベット人は約60年かけて、建築資材などをこの峻険な山に持ち上げてTibetan Villageを築き上げた訳で、人間の絶えざる営みの成果に感嘆した。

因みに、我々が泊まったホテルKashmir Cottageは山の中腹Middle Dharamsalaに在り、Dalai Lamaの母親の居宅だった平屋と隣接建物から成り、客10－15人収容が精々の宿だが、平屋は趣のある建て造りだった。

同行のU-氏はチベット人社会に人脈を持ち、今回のインド国内航空便・ホテルはデリーのチベット人旅行社の手配であり、その関係から17日夕飯は亡命政府内相Gyari Dolma女史に招待され

てゲストハウスで御馳走になった。女史は若い僧2名を伴い、内1名は難民として日本に住んだことがある由で達者な日本語通訳だった。

女史はDarjeelingの出身で亡父が故藤井日達師（ニチメン故石橋上人の師・Bombay時代に筆者宅に両師にご来駕頂いたことあり）と親しかったこと、地元の子供達と遊びながら訓戒を垂れておられた藤井師をDarjeelingの住民全部が尊敬していたこと、在印チベット人中 老いて或いは係累者無などでBelow Poverty Lineに陥っている者が約1500人おり内務省が配慮していること、など約2時間話が弾んだ。Dalai Lamaが19日にDharamsalaに戻るのでは会わないか？と誘われたが、我々はDharamsalaを19日午前中に発つ予定で滞在延長不能と謝絶した。

尚、Dolma女史の携帯電話などに時折妨害電波が入る、発信元は中国ではないか・・・、防げないか？と云う質問が専門家U-氏に為され、U-氏が「ハッキングと防御はたちごとで、結論は防止不能。従って重要データはインターネットから遮断しておくことが肝要」と解説した。

ゲストハウスは一般に開放されているようで、二組の欧米人グループが大部屋で夕飯を摂っていた。

18日は庸車してUPに向かい、チベット文化博物館(Tibetan Library)、チベット国会議事堂(Parliament of Tibetan Government in exile)、チベット医療展示館(漢方薬 - Tibetan Medical Institute)、などを見学後、下界におりて20km離

れた場所に在る広大なチベット寺院(Namgyal Monastery)を拝観した。南印MysoreのTibetan Golden Templeには及ばないものの、立派な僧房と学舎があり、ノートと筆記用具を手にした12-14歳位の小僧約10名が学舎から昼食房に向かうのを見かけた。同行のK-氏が「これで彼等の人生が決まるのだよな・・・」と述懐したのが記憶に残る。

Dalai Lamaと云うカリスマ性豊かな指導者存命中は世界各地からの義捐金でチベット人社会を維持して行けようし、この間にチベット人が自立浮上できるように教育しておかないと、彼の没後チベット人の多くがインド人最下層の中に埋没してしまうのではないかと・・・

と他事ながら思い遣られる。

17日、18日の両日は推定気温7-8度で寒かった。

19日、Dharamsala空港を12:45発予定だったが、約1時間遅れでBonbardier機到着、待合室の客大勢が機から降り立ったDalai Lamaにカメラを向ける一幕があった。彼は確か81歳か82歳、肌寒い気候にも拘らず片肌脱いだ僧服で背中がやや曲がっているようだった。

Dharamsala からDelhi-Colomboで乗り継ぎ約24時間かけて20日午後3時頃成田帰着した。このColombo発の飛行機もレーダー故障で2時間遅れ。

今回の旅では飛行機に7回乗ったが、定刻通りだったのはBangalore発Delhi行のAir India便だけだった。



Namgyal 寺院の本堂と附属建物の一部



国会議事堂



Dharamsaka UP のチベット街の繁華街



亡命政府内相Dolma女史 U-氏 手前高尾

午 と 牛

浜 地 道 雄



今年、2014年、平成26年の干支(えと)は「午(うま)」だ。

「牛(うし)」とどう違うのか?と駐日サウディ・アラビア大使(早稲田大学卒、日本語堪能)に聞かれた。「うん、角(つの)が無いのだ」と答えたが、納得してもらえたか?

その大使から、競馬(府中)に招かれたことがある。ミュージカル「My Fair Lady」で、ハッピーバースデーを演じるロンドン下町娘イライザが貴婦人に仕立てられる過程で連れて行かれたのがアスコット競馬場の「社交場」だった。

そんなことを思いだしながら「アラブ馬」ということを考えた。

首都リヤドの駐在中、砂漠の中にあった馬場で乗せてもらったのは「アラブ馬」だった。町には確かに競馬場もあったが、駱駝レースを観たような気がする。

そのアラブ馬を先祖として、Thorough Bred(Thoroughbred)、つまり、純血交配を続けてきた極めて繊細な芸術作品がサラブレッドなのだー。

話は突然1973年7月に遡る。筆者は蒸し暑いドゥバイ(UAEアラブ首長国連邦の一)の安宿、効率の悪いクーラのもと、寝苦しい夜を過ごしていた。

ロビーが騒がしい。詳しくは後日分かった。

パリから東京に向かったJAL機が赤軍派にハイジャックされ、ドゥバイに着陸。結局リビアのベンガジ空港に向かいそこで爆破された。

その間、3日間、管制塔にこもってテロ側と交渉にあたったのが、当時25歳だったUAE国防大臣

のSheikh(称号) Mohamad(本人名) Al Maktoum(家名)だった。

さて、その「シェイク・モハammad」こそ、現在のUAEのドゥバイ首長である。モハammad首長は海外からの投資を積極的に受け入れ、ドゥバイを湾岸地域における観光と商業の中心都市に成長させた。その名を知る人ぞ知る。世界有数の「馬主」として、また「サラブレッド・ビジネスマン」として。競馬王マクトウム家4人兄弟のこの三男は、競馬組織ゴドルフィンの総帥で、世界各地に牧場を保有している。「シェイク・モハammad」が馬に魅入られたのはイギリス留学時代。その原点は「我々がサラブレッドを作ったからだ」という自負だった。我々とは砂漠の民ベドウィン。

確かに、古来、馬は人間の友。色々な英語がある。

辞書を引くだけで、hold your horseしばらく様子をみる、ride the high horse 威張る、work like a horse がむしゃらに働く、a man on horse 強力な指導者、horse sense 常識、horse trading サギ。それぞれ分かるような気がする。

が、翻訳が難しいのは「ウマが合う hit it off/get along well」で、これは騎手と馬との相性を言う。他方、manualのようにラテン語の「手manus」からの派生語がmanageで、元々、手綱で馬を御すことだ。ウマの骨はa nobody。馬耳東風はpreaching to the wind。

興味深いのは「馬脚を表す」。意識して「show the cloven(割れた) hoof(ひづめ)を見せる」とは悪魔(ヤギ)ということになる。これなどは旧約聖書「レビ記」(Leviticus 11:4)に由来するから、奥が深い。前記イライザは競馬場で興奮して馬脚を表してしまい、つい叫んでしまう。“Move your blooming arse!”(解説は本稿では憚るので、皆さま、お調べあれー)

(社)日本在外企業協会「月刊グローバル経営」誌より、転載・加筆。

書評

「流星ひとつ」 沢木耕太郎 著 新潮社

澁 谷 義

著者はノンフィクション作家で、エッセイスト、小説家、写真家でもある。

本書は、藤圭子とのロングインタビューで、28歳で芸能界を引退する際、数回にわたりおこなわれた。

30年も未発表で封印されていたが、藤圭子は出版に同意していた。

歌手を引退した後、圭子は米国に留学した。帰国して暫くして、突然藤圭子がマンションから飛び降り自殺した。著者は信じられない気持ちだった。

娘の宇多田ヒカルさんからコメントが発表された。「母は長い間、精神の病に苦しめられていました。でも、母の娘であることを誇りに思います。・・・」と。元・夫の宇多田照実氏のコメントも発表された。精神の病で奇矯な行動を繰り返したあげくの結果であるとの説明があった。

藤圭子は、宇多田照実氏の前に、歌手の前川清とも結婚していた。圭子は清の歌は、大好きで抜群にうまいと言った。すごくいい人とも言っていたが、圭子の方から別れた。

作家の五味康祐に占ってもらったら、圭子は男運が悪いと言われてしまった。

30年以上も封印していたが、圭子が自殺した後、新潮社の新井氏に読んでもらったら「内容も方法も古びていない。宇多田ヒカルさんに読ませてあげたい。」と言われた。

タイトルの「流星ひとつ」は、自死することで本当に星が流れるように、この世を去ってしまったことを象徴している。藤圭子の幻の墓に手向けることができる、たった一輪の花なのかもしれないと思うと著者は結んでいる。

一方、宇多田ヒカルさんの父昭寛氏は、本書をめぐり著者に激怒したと伝えられた。圭子は岩手県一関生まれ、本名宇多田純子で旭川育ち、1960から1970代に一世を風靡する。「夜の世界に生き

る女の感情を描いた暗く陰鬱な歌」を、伸びやかに深々と歌いあげた。代表的な曲は「圭子の夢は夜ひらく」である。私もカラオケで歌うが、少々暗い感じの曲である。

『参考になる情報』

- 1) NHKスペシャル 平成26・3・30 妊娠中の母親がダイエットしていると、
バランスの悪い食事になり、子供は肥りやすくなる。成長してから楽器を学ぶと神経細胞が発達、太くなる。老いても努力すれば神経細胞が活発化する。
- 2) NHKあさイチ 平成26・3・26 紅茶のおいしい淹れ方 95度Cで淹れる。
100度ではおいしさが失われる。
- 3) NHKためしてガッテン 平成26・3・26 LDLコレステロールが180～220位高いと、心臓病のリスクが高くなる。基準値は140。
- 4) TBSテレビ 平成26・2・27 歯ブラシにヨーグルト（乳酸菌、砂糖なし）をつけて磨くと歯周病予防になる。腰痛の原因は仙腸関節の機能障害が原因。関連する筋肉が痛み、しびれて腰痛になる。肩こりは乳酸菌がたまるため。ブロック注射で、痛みはとれて、血流がよくなり治る。肩こり体操も効果ある。
- 5) 日本テレビ 平成26・3・29 朝食を食べないと心臓病のリスクが増える。頭頂部の毛が薄い男性は、心臓病のリスクが高い。
- 6) NHKスペシャル 平成26・4・6 人体ミクロの大冒険 60兆の細胞からなる人体。血液を調べると、長寿と細胞の関係がわかる。地中海サルベニア島の調査では免疫細胞が100歳でも衰えない。病原体に抵抗力が強い。衰えても免疫細胞は運動で改善できる。免疫細胞の暴走が起これば組織が破壊されて老化、病気が起こる。

「映画は面白い」

澁 谷 義

以前は映画をよく見たものだが、近年は少ない。過去一年間に見た映画は、『少年H』、『利休にたずねよ』、『永遠の0』である。

平成24年5月に、「懐かしの映画」として、14映画を紹介した。風と共に去りぬ、ローマの休日、太陽がいっぱい、裏窓、生きる、禁じられた遊び、楳山節考、エデンの東、マデイソン郡の橋、タイタニック、沈まぬ太陽、Shall we Dance ?、愛の讃歌、ヨコハマメリーであった。

上記以外の映画鑑賞を記してみたい。

- 1) 失楽園：原作は渡辺淳一である。男女の濃密な性愛を描いている。監督は森田芳光、主役は役所広司と黒木瞳である。
- 2) おくりびと：遺体を棺に納める納棺師の仕事にユーモアを散りばめて描いている。主役は本木雅弘、山崎努、広末涼子である。監督は滝田洋二郎。
- 3) 北の零年：北海道の開拓を描いている。アイヌ役の豊川悦司、開拓先遣隊の渡辺謙、妻役の吉永小百合、商人の香川照之などが主役。監督は行定勲（ゆきさだいさお）。
- 4) 寝ずの番：津川雅彦が初監督のデビュー作。主役は中井貴一、長門裕之、堺正章、岸部一徳などである。色っぽいコメディイで笑わせられた。
- 5) 日本沈没：地球の大規模な地殻変動と温暖化の影響で、日本列島が急速に海中に没するという恐ろしい映画であった。そのリアル感に圧倒された。監督は樋口真司、主役は草薙剛、豊川悦司、大地真央などである。
- 6) 11・25 自決の日、三島由紀夫と若者たち：実際に起きた事件を元になっている。
1970年11月25日、楯の会若者の森田必勝らとともに自衛隊の市ヶ谷駐屯地に乱入し、「天皇陛下万歳」と叫んで二人は自決した。三島役は井浦新、森田役は満島真之介、監督は若松孝二。自決のシーンは凄かった。
- 7) プライド 運命の瞬間（とき）：1948年12月23日、極東国際軍事裁判の判決により、東條英機らA級戦犯7名が絞首刑の執行を受けた。その全容をリアルにドラマチックに再現している。東條英機役は津川雅彦。キーナン検事との運命の対決が迫真に迫った。監督は伊藤俊也。

上記の他に、多くの映画を鑑賞してきた。ダ・ヴィンチコード、西遊記、明日への遺言、TROY、男たちの大和、The Last Samurai、The Iron Lady、地下鉄に乗ってなどである。



国民性(エートス)と国民感情(パトス)について(その一)

竹 内 可 能

昨年末のことであった。安倍首相が突然何を思ったのか靖国神社に首相として参拝し国内外の輿論を買ってからこの方、私は一日本人でありながらその日本人のことがよくわからなくなっている自分に気がついた。たまたま貪るようにして読んだことのある司馬遼太郎の「この国のかたち」のことを思いだし、私自身も司馬さんとは別の角度からこの国とこれを取り巻く国々の国民性について、あらためて考えてみようと思い立った次第である。

「エートス」と「パトス」

「エートス」という言葉がある。普段あまり聞きなれないが語源はギリシャ語からラテン語か、英語なら「ethos」と記して一般的には「民族や国民の精神・気風」といったところかと思われる。司馬さんならさしずめ融通無碍に「精神的風土」とでも受け流されようか、一口にいえば「国民性」という言葉がふさわしい。

これを西洋風に解釈すると「人間とか社会（国家）の持つ持続的・恒常的な性格」であり、これに對蹠的に用いられる言葉として「パトス」(pathos)が挙げられるという。このパトスは英語読みなら「ペーソス」となり、その意味なら哀感とか情感として日本人の間にもなじみは深い。

しかし「パトス」(pathos)は語源的にはこれも一種の哲学用語の類のはずで、もとはといえば「受動・受難」を意味したらしい。つまり人間がある事件とか他人によって触発される感情は、一種受動・受難といった意識の結果として受け止められる。それが日本語にいう「哀感・情感」というわけだが、このパトスにはもう一つ重要な意味合いとして「情念・激情」があることに注目しておこう。

同じパトスであっても「哀感・情感」は自然発生的であるのに対して、「情念・激情」は受難的であり負の感情である。先述のように「エートス」が人間とか社会の持続的、恒常的な性格を意味するのに対して、「パトス」は一瞬の感情であり問題が事件であったりすれば、たちまち湧き起こる感情がとてつもない不測の事態をまねきかねない曲者である。

のっけからエートスだのパトスだの耳慣れない言葉を引き合いにだしたのは他でもない。最近の日本を取り巻く国際的な政治環境の悪化は、政治問題もさることながら、お互いのきしみあいの中にこれまで久しく見られなかった、国民性や国民感情のぶつかり合いが認められるからである。とりわけ靖国の杜はこの国の戦没者に加えるに、太平洋戦争のA級戦犯者たちが合祀されて以来、この大戦の被害国のみならず自国の西南戦争にまでさかのぼる戦争犠牲者の、精霊という精霊が、いわば負のパトスの恨みを晴らそうとすることく、あまねく依り憑くところとなってしまうている。

我人はここで複雑な国際場裡のアポリアを解きほぐすためにも、エートスとパトスを中心にこの国のかたちを論じてみたいのである。

これは私の勝手な想像をまきちらすようで憚られる感じではあるが、古来近代にいたるまで歴史上に、この国のかたちを制する立法にかかわり、その範を海外に求めた為政者が二人いたと思う。その一人は古代政治権力の巨魁藤原不比等であり、もう一人は明治維新の元勳伊藤博文である。不比等は当時の中国大陆に、また伊藤はヨーロッパ大陸に、それぞれこの国のかたちの範をとりながら片や律令制度を、片や大日本帝国憲法を制定した。

卑近な話のように思われるかもしれないが、不比等の隠れた功績の一つは、よくいわれるようにありったけの大陸（唐）の文物を摂取しながら、ついに宦官と科挙の制度は持ち込まなかったことである。彼の目には彼我のエートス（国民性）の違いのようなものが歴然としていたと思える。

さらに伊藤についていうなら、彼は明治15年詔勅を帯びて憲法制定のための調査団をひきいてドイツ留学に出向いたが、その彼が結局範を見だすことになる憲法は、英国でもなければフランスでもない、新興国ドイツのものだったことである。むろん革命後の政情も不安定なフランスは選択肢の外だったはずだから、彼が英国ではなくドイツを選択したのは、畢竟するに彼我のエートスに見だした或る共通項だったに違いないと思うと興味深いものがある。このことはもう一度後から考えて見たい。

民族性とか国民性とか一口に言ってエートスと呼ばれるものは、長い目で見れば時代や歴史によって作られてきたものだろう。それはまた同時に時代や歴史によって変化してゆくものでもあろう。人間の歴史を振り返ってみれば、国家の歴史なんて高々千年とか二千年どまりといったところだから、あまり興味本位で国民性を云々するのは慎まねばなるまい。しかしそんな中に会っても文明論的な観点からうかがい知るかぎり、これぞこの国民のエートスだと認められるような顕著な例にも結構こと欠かないものである。

「文明開化」と日本人

これから本稿で私が取り上げようとする国民性の対象には、とりあえず我が国の他はドイツ、英国、中国だが、現代文明の元祖たる古代ローマ帝国のことなどもふくめて、頭の中のキーワードには「文明」と「歴史」を据えながら考えていきたいと思う。

安倍首相はことあるごとに隣りの国々との係争問題などで、特定の事件についての歴史認識を問われると、それは歴史家に委ねるという意味の発言がよく見受けられる。それ自体かねてから異なことと思ってはきたが、私が懸念するのは、首相が歴史もさることながらどうも文明というものにたいする認識が希薄らしいことである。広義の文明は言ってみれば、それが精神的、物質的、技術的であることを問わず、人間の知的で普遍的な所産ということになろうから、一種の人類遺産と考えてもよいだろう。

日本是国家主導のもとに、このような地球規模的な人類遺産というべき文明を、歴史上二度にわたってユーラシア大陸から導入した。一度目は奈良・平安朝時代の唐文明、二度目が明治維新期の西欧文明であった。この国がこれら文明の利器や文物の摂取にあたって見せつけた、素早さやその質量の大きさには目を見張るものがある。

しかし安倍首相にかぎらず、われわれ日本人は、えてして「文明」というものの理解が安直だったように思われる。とりわけ明治維新期、「文明開化」と「脱亜入欧」の名のもとに、物質的な「文明の利器」の導入を急ぐあまり、その底流をなす古代ギリシャ・ローマ文明と、それを支えた「市民」(civil)という概念の理解が全く欠落してしまったのではないかと、というのが私の考えの中にある。

もともと西洋における立憲主義の歴史には、その根本に、「市民」による権力の縛り(制御)という強い思想が貫かれており、それは今日まで西洋諸国の憲法のなかに脈々と流れているという。そうして見てくると、首相の国会答弁での発言など

から知るかぎり彼が考える憲法には、その根本にむしろ権力が国民を縛るという逆転の発想が流れているのは歴然としているのである。

なぜ「文明」にそれほど拘るのか。

私は日本語の「文明開化」という言葉は、civilizationという英語にたいしての素晴らしい訳語だと思っている。もっと言えば、今や原語のcivilizationの方が文明を意味するには相応しいとは思えないのだ。なぜなら現代では大抵の先進諸国は都市化とか市民化といった段階は過去のものとなり、今や時代は国際化(internationalization)も通り越して、まさに文字通り世界化・地球化(globalization)の域に突入している感がある。

私の謂わんとするのはこういうことである。つまり未来の「文明」を英語で表すとすればcivilizationではなく globalizationにこそ求められるべきではないか。そしてこのような時代の接近を現実目に見えぬにしながら、東アジアという地球の一角で同じ地域の大国同士が角を突き合わせ、見苦しい行動と聞き苦しい言葉の応酬に火花を散らす愚は、後進国ならともかくとして、先進国家としては「文明」の名にかけて決して取るべき道ではないということだ。畢竟するに「文明」は狭義の国家主義(nationalism)とは相いれないのである。

前置きの最後に私の好きな哲学者ヘーゲルの言葉を借りて記しておきたい。それは「絶対精神の自己実現」という彼の弁証法的な歴史観である。あの当時(19世紀)彼が絶対精神というとき意味したのは「神」だったから、現代なら「理性」とか「真理」、もっと平たく言えば「文明」と置き換えてもよいだろう。その彼が謂わんとするのは私の解釈だが、「人間の理性は、遅々として進まぬようにしか見えない矛盾に満ちた歴史のなかで、それでも歴史が進んでゆくにしがたい、やがて自ずと必ず実現してゆくものだ。」

ドイツの地から、フランス革命の一部始終を見据えていた晩年の哲学者の述懐ではないか、というのが私の想像である。

観念論的なドイツ人

前置きにしては長く固苦しい話になってしまった。

話を元に戻して、ここにドイツの例を真っ先に持ってきた理由を挙げたい。第一に、先にも触れたように我が国初めての憲法がこの国のものに範をとったことで、日本の明治以降の命運を制したこと。第二に、日本が第二次世界大戦でイタリアとともにドイツと三国同盟を結び、その結果が対

米戦争の無惨な敗北で終焉したことに尽きる。

ドイツ人が観念的だとか理屈っぽいといった風評は街角でよく耳にするところである。おそらくはカントやショウペンハウアー、それにヘーゲルやマルクスまでをいっしょくたにすれば、彼ら哲学者たちに触れたことのある者にとっては、それだけでも観念論的ドイツ人のイメージは彷彿するであろう。

東洋人に比べると形而上学的思考の執拗さは、西洋人に共通なものといってよからうから、広くエートスというならフランス人も英国人も同類項として束ねられようが、そうはいっても子細に見れば、各国にはそれぞれ微妙な違いのあることに気づかされるものだ。ドイツ人がすぐれて観念論的であり、それに比べて英国人が如何に経験論的であるかについて、以下は私の所見である。

ドイツ人のエートスについて語るなら、およそ千年にわたる歴史の中の「神聖ローマ帝国」ほど好個な適材はない。この国が如何に観念論的な存在に終始してきたかは、この国の名称「神聖ローマ帝国」そのもののの中に隠されているからである。以下冒頭に記した数行のドイツの歴史に係る一節は、歴史に興味のない方は流し読みでそのまま先に進んでいただきたい。

まず10世紀の中ごろ(962)オットー一世が皇帝戴冠を果たして以来、19世紀初頭の神聖ローマ帝国の崩壊(1806)にいたるまで、およそ千年になんなんとするこの国の、国名の変遷を大ざっぱに見てみよう。まずピピンが起こしたカロリン朝のカール大帝のまで遡れば(800)、このときの名称はれっきとした「西ローマ帝国」→それがオットー一世のときは単なる「帝国」→11世紀ザリエル朝時代は「ローマ帝国」→12世紀シュタウフェン朝時代は「神聖帝国」→そして13世紀の大空位時代以後は「神聖ローマ帝国」。

古代の名にし負う西ローマ帝国ならとっくの昔に(476)滅亡しているし、版図はといえばこれも栄光のフランスやスペインがすっぽり抜け落ちてしまっている。ローマだって当時はもう教皇領になっている。カノッサの屈辱に見るまでもなく、神権を傘にきた教皇のローマは皇帝の思うままのものではなくなっていた。

早いのはしが国の名前にわざわざ「神聖」などという言葉をかぶせたのも、俗権の代表としての皇帝が、神権をかざすローマ教皇に対抗するため、帝国自ら独立して「神聖」であることの宣言同然であった。

とはいえ古代ローマ帝国こそはドイツ人永遠の

誇りでありつづけた。それは彼らが千年抱き続けたロマンであり夢であり希望でもあったろう。しかしながらその彼らが自らそう呼んで憚らなかった自分たちの「帝国」が、実際には帝国とは似て

も似つかぬ奇体な国のかたちになり下がっていることに気づくには、千年の年月とフランス革命、それにつづくナポレオン皇帝の出現を必要としたということだろうか。彼らがいうところの帝国の実態はといえば、それは領邦国家などとも呼ばれ、大小合わせて三百にも達するといわれた、いわゆる主権国家(諸侯領、司教領ほか帝国都市などをふくむ)を寄せ集めての一種の「連邦国家」であったのだ。

因みにあの詩人ゲーテが終生の住処としたワイマール公領とて、たかだか人口6,000といわれたが、これもれっきとした一領邦国家だったことを知る日本人は少ない。学者先生方のなかには、そもそも「神聖ローマ帝国」などという帝国は実質的には存在しなかった、というごとき嘘のような学説を説く者が後を絶たないのもむべなるかなである。

閑話休題

「ヨーロッパ」という呼称は、セム語系のギリシャ語エレボス(闇)からでたといわれている。ギリシャの主神ゼウスが女神エウロペを掠奪した、という神話もこの言葉の含意からでたものらしい。

前一世紀ごろ古代ギリシャ・ローマ人が地中海文明を謳歌していた時期だが、その当時彼らにとってのヨーロッパといえば、ケルト人の棲む西方異境の世界(現在のフランス)をさしたものだ。それより(ライン河より)さらに東方の地は、まさに十把一絡げにゲルマン民族と呼ばれていた各種蛮族が棲む森と暗闇の空間であったろう。ローマの将軍カエサルも手出しすることはなかった未開の地であったのだ。

その蛮族ゲルマン民族が四、五世紀ごろ歴史に名高い大移動を起こして、目指したのがローマ帝国入りであった。そしてその挙句のはてに帝国は滅びることになるが、この時ゲルマン民族の脳裏に焼き付いた栄光のローマ帝国の残照が、その後中世を経て千年の神聖ローマ帝国、そして今日のドイツにまで、消え去ることがなかったというのは、驚嘆に値するというほかはない。

ドイツ人は中世から近世にかけて千年もの間、かつての古代ローマ帝国の栄華の再現を夢みていたのか、さもなければ自分たちドイツ人こそ古代ローマ帝国の後裔(エピゴネン)だとひたすら信じていたのだ。現実を見ればそれは空想に過ぎ

ないことは歴然としていたのだが、彼らの精神はそれが夢・幻であることを決して認めようとはしなかった。「かくありたい、かくあるべし」という彼らの願望や理念は、現実を離れて化石のように固い観念となっていたにちがいない。

私はここにドイツ人のドイツ人的なエートスの神髄を見る思いをいたす者である。

日本人のエートス「天皇制」

明治の大日本帝国憲法はその第一条に「大日本帝国は万世一系の天皇之を統治す」とあり、第三条にはご存じのように有名な「天皇は神聖にしてこれを侵すべからず」という条項がある。

これは私の推理にわたるが、この第三条に記載の「神聖」という言葉は、伊藤博文が憲法調査のためドイツに渡った当時、真っ先に学んだと思われる「神聖ローマ帝国」の名称から選び取ったものではないかと思っている。そればかりではない。

彼は先述のようにドイツ人がついに千年の見果てぬ夢で終わってしまったもの、つまりは神聖な帝国そして永遠の皇帝が、この国日本でならば、まさに万世一系の血統書付皇帝よろしき天皇であることを確信したにちがいない。そのときの伊藤が、かつて「神聖ローマ帝国」の皇帝が君臨したその帝国は、千年にわたる夢・幻の国だったことを知ってか知らずだったか。

その伊藤だが、一介の百姓の倅の身分にして長州藩の志士気取りで討幕にかまけていたころなら、その彼には天皇の存在などといったところで、幕末の幕府との戦いのなかで争奪の対象とされた「錦の御旗」以上の価値を知っていたとは思えない。

しかしその彼はドイツ人が千年の間、観念でしか捉えられなかった夢の中に彼らのエートスをくみ取り、そこに長く日本人の中にも眠っていたものとの共通項を感じ取ったはずである。そしてこれを観念ではなく現実のものとするのに時間はいらなかった。大日本帝国憲法の制定であり天皇制の復活がそれであった。

おそらくはその当時伊藤が考えていた天皇制のなかの天皇と言え、憲法上の条文はともかくとして、すべからく古来の天皇がそうであったように「君臨すれども統治せず」の神聖な天皇だったはずである。だが、西南戦争を切り抜けたばかりの、そして脱亜入欧を急ぐ多難な明治政府にとっては、後鳥羽上皇の「承久の乱」や後醍醐天皇の「南北朝の乱」など、神聖な君主が俗権に目がくらんだときの、日本歴史の悪夢を想うほどのゆとりはなかったのであろう。

その神聖にして侵すべからざる天皇制が、およそ半世紀の後、太平洋戦争の敗戦とともに崩壊したとき、われわれ日本人はあらためてドイツ人がすぐれて観念論的であるのに似て、われわれも又あまりに精神論的に過ぎたことに気がついたのであった。

私がドイツ人中のドイツ人と考える作家トーマス・マンはその名著「魔の山」の中で、主人公の若者ハンス・カストルプに対するに、恋人の口を借りてこんなセリフを言わせる箇所がある。「あなた方(ドイツ人)はすこし小市民的なのよ。あなたたちは自由よりも秩序を愛するわね、というのがヨーロッパでの通り相場よ。」

このところ「小市民的」という言葉を「小列島民的」とでも置き換えさえすれば、トーマス・マンのドイツ人観は日本人にも当てはまろうというものだ。ドイツにしても日本にしても20世紀に入ってからというもの、国家が国民に強要した秩序と忍従の代償は大きかったという他はない。

「経験論的」そして実際のな英国人

ドイツ人がすぐれて観念論的であるのに対して英国人とは言えば、彼らが実に経験論的で实际的であるのは、これこそ彼らの国民性(エートス)というに相応しいのではないか。

因みに「英国経験論」といえば、17世紀英国きつての哲学者にして政治思想家として名高いジョン・ロックに代表される哲学思想である。この思想は元はと言えば「ドイツ観念論」に対比して争われた、当時の哲学論争のものであったが、ここには私がいう英国人的エートスを解説するに持ってこいの思想がこめられているので、あえて記しておきたいのである。

難しい話は抜きにしてジョン・ロックの思想の要はといえば、かの「タルバ・ラサ」(白紙)の理論である。ドーヴァー海峡をへだてた英・独間の哲学論争が何だったのかというに、それは人間の「認識」なるものが一体何故生じるかにあった。片やドイツ観念論では、それは人間生得のものだ(生得観念と呼んだ)としたのに対して、英国経験論では認識は人間が生まれ落ちた時は真っ白なキャンパス(タルバ・ラサ)同然であって、その赤子が育つ過程で重ねられる「経験」によって獲得されるものだとした。

今日から見れば何の変哲もなさそうな経験論のように思えるが、どうしてどうしてその当時なら、これがドイツ観念論の代表的な哲学者カントに最も影響を及ぼしたとされる思想である。そしてこの私を驚かすところのものは、こうしたジョン・

ロックに代表される「英国経験論」のなかに、透かして見えてくるような街角の英国人的なエートスなのだ。そこには凡夫であれ哲学者であれ、「経験と歴史」を尊重し優先しようとする英国人の気質がある。

「proper」であることの意味

もう一つ英国人的エートスの考察に欠かせないと思われる、同じジョン・ロックの、これは政治思想について記しておきたいことがある。一言でいうならば、「proper」であることの意味といったらよからうか。

話をもう一度17世紀に戻してみよう。イギリス立憲政治の基礎を確立したとされる、あの「権利章典」(billofrights)の時代である。細かなことは省略させてもらうとして、高校時代に習った世界史のおさらいとして権利章典なるもの、これを一言でいうなら、英国の新たな国のかたちを制定することになる、歴史的な議会制定法であった。この章典立ち上げに強力なバックグラウンドをなしたのが、言わんとするところのジョン・ロックの「proper」であるべき思想であった。

「proper」という英単語なら日本人の中学生でも知っていよう、その意味が「適当な」「適切な」とかいうほかに、「固有の」「独特の」を表すごく普通の言葉でしかない。しかし政治思想家でもあったジョン・ロックは、このありきたりの形容詞「proper」と、それが名詞に転化して「property」となるまでの概念のなかに、彼の政治思想のすべてを投げ入れたと思われる「国政二論」を著した。

王権による圧政下、彼が議会を通じて目指した市民の権利はといえば、他でもない市民の自由と生命と財産であった。そして彼の思想の核心は、

これらの市民権が王権を前にして、何にもまして「proper」(適切な)ものでなければならぬ、としたことであった。したがって財産権についても「proper」な手段で獲得されるものであるかぎり、それは市民の「固有の財産」(property)として認められることを主張していたのだ。

一市民の権利が「適切」であると認められる以上は、その権利はその市民の「固有」のものであるとするジョン・ロックのproper理論であった。「個人の尊厳」とか「人権」といった現代の社会理念の根源は、すべからずこの思想に求められると言ってよからうかと思える。

日頃ごく「適当に」生きてきた私など平均的日本人にとって、この思想家の哲学にはほとんど圧倒される思いを禁じえないものがある。今やわれ

われにとって「適当」とか「適切」とかいった言葉自体、「いい加減」とか「ちゃらんぼらん」程度の代名詞になりさがっているのではないか、などと思えばこそである。

何が、何処が適切なのかを判断するのは、「黄金分割」の線分に似て至難の業かとも思えるが、ジョン・ロックにとってはそうではなかったのだ。彼はあの一三世紀のマグナ・カルタ(大憲章)以来の、王権と市民権の闘いの「歴史と経験」のなかに、気が遠くなるような息の長い英国人のエートスというべきものを、肌で感じ取っていたのだと思う。そこには思想といえども観念論の微塵も認められない、実践的な経験論がどっかりと腰をすえている気配がある。

幕末の長州・下関が列強4か国の砲撃をあびて大敗北を喫したのを機会に、伊藤博文は井上馨らとともに英国に留学した経験があった。おそらくこのときの彼は英国経験論をはじめとして多くのことを英国に学んだことと思う。それだけに彼の制定になる大日本帝国憲法のモデル・ステートが英国ではなくドイツだったのは、これは私の推測だが、ご承知のように英国には歴史的にもいわゆる憲法典といった法は存在してこなかったことによるのであろう。

英国の英国たるゆえんがここにも歴然としているのは、国家の基本的な性格を規定するものとしての憲法も、マグナ・カルタ以来今日までの歴史と経験の中の、議会決議、判例、国際条約といった成分法(慣習をもふくめて)の集合体と見なされてきた事実である。要すれば法典としての憲法はないのであるから、これを別名「不文憲法」とか「不成典憲法」とも言うらしい。伊藤が取りつく隙もなかったのは無理からぬことと思える。

調子に乗って書きつけている間に、どうやら紙面に限りのあることを忘れていたようだ。この辺で今回は筆をおかねばならない。この先お隣り中国大陆にひそむ魔性のエートス、「易姓革命」の思想についての歴史的な考察は避けて通れないことと承知しているし、この国の安倍首相のこれまた不穏な右旋回の傾向についても、パトス(それも負の感情としての情念・激情)のことなどもふくめて、改めて主題のエートス(国民性)といった観点から考え起こしてみたいと思っている。許されるなら次号でまたお会いしたい。

(つづく)

高木靖雄さんを偲んで

高 木 恒 久



【写真左から】高木恒久・千鶴夫人、故 高木靖雄兄、
高木亨一兄、右端は故 田中文彦兄

高木靖雄先輩が1月22日に亡くなられた。享年82才。私が入社して間もなくドイツから帰国され、業務部東西貿易課に配属された。当時、我々の職場の陣容は佐分利副部長、長廣課長。その下に松村篤雄、高木靖雄、松村誠三、栗原哲郎。そして新入社員の私でした。同じ苗字ゆえビッグ高木、スモール高木と呼び分けられたりしました。

高木さんから教わった事の一つで忘れられないのは、業務部が廊下とんびしてはならん。何故進展実業がソ連の商売の先頭を走っているのか調べろ。丹念に調べてみると同社が銑鉄、非鉄金属を沢山買っていることが分かり、それを高木さんに報告すると、すぐ実態を表にして営業部長を口説けと仰るので、つまり沢山輸入すれば、輸出も沢山出来ることが分かる資料を作って、金田鉄鋼原料副部長に入社早々の私が一人で銑鉄を買ってくださいとお願いに行った。初対面の私が小生意気に見えたのでしょう、金田さんはこの若造とばかり、怒り出し茶碗もひっくり返るほどのご立腹でしたが、それでも食いついてお願いし続けたら、銑鉄を2万トン買って下さった。高木先輩の指導で商売が一つできたのだが、話はそれで終わらず、ソ連の鉄鉱石の総輸入権を取るという大きな成果

につながって行ったのでした。

当時は残業をおえると近くの「室采」で焼きそば食べて、セシボンでトリハイ呑んだりして帰宅しました。

その頃高木さんにはドイツに残してきた婚約者がいて、会社の許可が出たので日本に迎える準備をされていました。栗原さんが高木さんと交代で、デュッセルに赴任、松村さんは北京に、私はモスクワに赴任となり以降高木先輩とは別れ別れになりました。

その後20年も時間が過ぎた1982年頃ライブツィヒの見本市に出張することがあり、そこで高木靖雄さんに久々に会いました。高木さんの下宿で酒をありながら、朝3時まで歓談しました。「俺は今朝早くベルリンにゆくので寝るぞ」と云われる先輩に並んで私も布団にくるまって寝ましたが、朝、眼が覚めると高木さんはもう出発されたあとでした。その時訊きそびれたのはドイツ人の奥さんの事でしたが、あとから考えるとその頃既に離婚されていたのではないかと思います。

更に10年余の時は流れ、私が60才で定年退職。

その時、もう一人の友人、高木亨一さんも高木靖雄さんにいろいろお世話になった由。そして高木先輩は京都にお住まいだが、視力が弱まり生活がご不自由だと聞いていたので、一度「3高木の会」を京都でやろうという亨ちゃんの発想で、毎年1回京都の東華菜館で会食することになりました。

高木先輩は毎回、奥様の千鶴夫人を伴われていました。千鶴夫人は優しく明るい方で我々とも打ち解けて気軽に話をされる美しい方です。

ロシア美人の名バイオリニスト、アナスタシア嬢を私が呼んで独奏会を杉並でやったときには京都から態々ご夫妻で聴きに来てくださいました。

[illegible]

の街の某ホテルの中にある寿司屋のカウンターで、ひとり私を待ち受けていた姿がなつかしい。日本酒がよく似合う姿だった。

彼と二人だけで話をするのは初めてだった。

私の最も苦手とする東大出の、東大以外は大学と認めない上からの目線で話されるとすれば、もしもそんな奴なら俺はホテルに帰って寝るぞと。それはともかくとして、何気なく飲み始めれば久しぶりの寿司に日本酒、飲むほどにすっかり出来上がった頃か沖本君、やにわにやや上からの目線で、この私に「中東支配人としての抱負は如何に？」などと来た。

私はカチンときたが、ここは御馳走に与っている手前許すこととして話を切り出したことを思い出す。即ち中東支配人席をドバイに移す。/現地法人を設立して本社離れを促す。/本社のトップを中東に呼び込む。/トルコに事務所再開設など。これらの案件は君の協力なしでは事が進まないのでは是非協力を願いたいと。

これを聞いた彼はいきなり私の手を握りしめ、自分も同じことを前々から考えていたが、現地から強い声が出ていなかったという。今欧州各店も時限爆弾をかかえている折だが、何とかやりくりしますと力強い手ごたえ。そうこうして興奮冷め

やらぬうちにも夜は更けて、ホテルに帰って寝たいことを告げると彼は自分の車で送るというのでお言葉に甘えた。が、見るとその車ときたらスクラップ寸前同様だったのには度肝を抜かされた。ホテルが近かったのが救いであった。

それからというものの、連日電話で話すことになった。

一週間かけて中東支配人席をドバイに移すことの本社承認を取得、一カ月後には彼がロンドン店の経理マン内海さん連れてドバイに来訪、現地の銀行との間に与信関係など打ち合わせの詰めを終えて帰られた。ロンドンの寿司屋での話から六か月位で現地法人が立ち上がったのだ。驚異のスピード！さすが赤門。

付き合ってみて初めて分かったことだった。彼は好き嫌いがはっきりしているが、いったん信頼を得ると誠に頼り甲斐のある人物である。麻雀は弱くゴルフをしている姿を見たことはないが、私にとってはこの上ない頼りがいのある赤門出の仲間であった。

醉生夢死、今はご冥福を祈るばかりである。

合 掌

《 会員の活動 》

会員・大建 雄志郎さんの自作の歌集『風の回廊』が、“ながらみ書房”より出版されました。

(6月6日発行; @2,500. - 190頁)。

退職後の66才から74歳までの短歌438首。朝日、読売、毎日、日経、神奈川新聞に投稿し掲載される。

今年、4月20日にも日経歌壇に載る。

2005, 2009, 2011, 2013年 ; 日経年間秀作集に選ばれる。

2008, 2010年 神奈川新聞社短歌年間賞。

大建さんは昭和37年ニチメン入社。燃料エネルギー部門、モスコー、ロンドン駐在。

【編集後記】

今年もまた春は足早に去り、“都ぞ春の錦なりける”の季節のなんと短かったことか。

6月に入り、夏の到来を思わせるような日々が続いている。

2014年もすでにハーフウェイにさしかかって来た。

世の中を見渡せば、殺伐とした凄惨な事件や悲劇が断続的に起きている。

国際情勢も不安定要因が蠢いていて、時に彼の地では戦火を見ている。

わが日本、わが身に災いの降りかからないことを祈るばかりだ。

先般、わが知友は、道路交差点で青信号を信じて渡ろうとしたところを横からの車にはねられて、瀕死の重傷を負った。

何事につけ、他人を信用せず、自らを守る手立てを講じたい。

さてニチメン東京社友会は、2006年に、旧“長月会”からのメタモルフォーゼとして発足し、今年で8年となる。『会報』も今回で第16号を数える。

素人集団のEDITORS、いまや三人のみとなった。

最後の砦に残る三人の老兵への援軍をお待ちします。 自薦他薦での世話人会への参加を期待します。

免疫学の世界的権威の某先生が、“ストレスの無い人生＝長生きをする人＝”と題して話しておられたことだが、(TBS 2012-9-2) ; *いい人であることを止める、*失敗は気にしない、*脳活動を活発にすることで感染に強くなる *運動はちんたらやるべし、等々。

『会報』の編纂でも、失敗を恐れず、かなりのチョンボをしながらも脳活動を重ねてきた。

“乗りかけた船からは下りるな”とツルゲーネフ名言集にあった。 どこまで行くか分からぬがしばらくは航行を続けるしかない。 会員各位の Contributionを期して待ちます。

(長谷川 洋)

ニチメン東京社友会

〒100-8691 東京都千代田区内幸町2-1-1
飯野ビルディング17F

発行人	；倉又 則夫	代表世話人
編集責任者	；長谷川 洋	世話人
アドバイザー・スタッフ	；倉持 次雄	世話人
	竹内 可能	世話人
印刷所	；(有) 関内	印刷